

Roots

弓浜半島物語

鳥取県経済同友会西部地区
ふるさと教育特別委員会

次代を担^{にな}う児童・生徒の皆さんへ

皆さんが暮らすこの地域を、皆さんは好きですか？

私は、大好きです。

皆さんにこの地域をもっと好きになってほしい、魅力的なことをもっと解^みってほしい、将来こ
こで育ったことに誇^{ほこ}りを持ってほしい。そのためにはこの地域をもっと知^{わか}ってほしい。そんな思
いからこの読本を作り、皆さんへプレゼントできることを大変うれしく思います。

この読本を手^てにされた地域の皆さんへ

われわれは、そんな思いでこの読本を作りました。作る過程で、われわれが知らないことがた
くさんあること、本当に魅力にあふれた地域であることを再認識出来ました。

地域の皆さんにも、一緒に読んでいただきたい、学んでいただきたい、そんな思いから冊数を
増やし、皆さんにもお読みいただけるようにしました。

旅の魅力の一つは、地元の人が、地元の言葉で、地元の魅力を熱く語^きることを聴^きくことだと思
います。ぜひ、皆さんでこの地域の魅力を語れるようになりましょう。

あらためて、この地域は食・住・遊など生活環境^{かんきょう}の全てが魅力的であると思います。

外から見ればわかるその大変貴重な魅力も、その内で暮らせばすぐ「日常」に変わってしまい
ます。この読本が、その「日常」に気づききっかけになればと。

私ども鳥取県経済同友会は、この地域の経済の活性化を念頭に活動しておりますが、安心・安
全で、自然に恵まれたこの地域に暮らす幸せがこれからも続きますことを大切に、今後も活動し
てまいります。

地域の皆さんのご協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。

鳥取県経済同友会

代表幹事 松村 順史

会員一同

はじめに

美保^{みほ}の海にひときわ美しい曲線を描く弓浜半島。大山が根を張ったか
のように伸びる日本最大の砂州^{さす}であるこの半島の成り立ちは、大変特異
である。この大地を形成する砂は1万年以上前からの自然の営みに加え
て、1000年にわたる人々の営み（母なる川・日野川上流で行われた“た
たら製鉄^{はいてつ}”の廃砂）で供給されたものであり、人工の半島と称しても
違和感がないほどだ。

そんな砂の半島を舞台に、古代から現代に至るまで人々が歴史を刻ん
できた。砂と闘^{たたか}い、共生し、大きな恵みをいただいてきた先人の足跡が
現在もあちこちに残っている。その一端でも知ること
ができれば、きっと私たちはこの地域を再発見できる
はずだ。地域の未来が見えてくるかもしれない。

さあ、想像の翼^{つばさ}を広げ、好奇心の帆^{こうきしん}をあげて、地域
のカタチ（Roots^{さく}*～根っこ～）を探る旅に出かけよう。



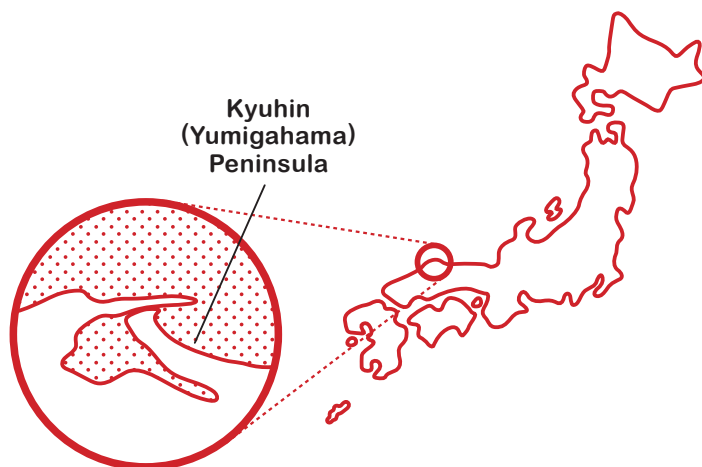
中海^{ほんそう}を帆走する北前船^{きたまえぶね}の復元船
『みちのく丸』（2011年）

※弓ヶ浜半島^{ゆみがはま}は弓浜半島^{きゅうひん}、夜見ヶ浜半島^{よみがはま}、五里ヶ浜^{ごりがはま}などと表現されていますが、
文中では古くから馴染みのある“弓浜半島”に統一します。

美保関高尾山^{たかおやま}から見る昭和6～9年頃の弓浜半島
堀美峯筆「鷹尾坐嶺之展望」（松江歴史館蔵）



地形の成り立ち



この地域の歴史を語る前に、この章では、地球の誕生から、大陸の形成、大陸の移動の歴史を見ておきたい。

歴史は、人と時が織りなすドラマであるが、同時にその歴史の舞台である地形も、歴史の展開に大きく関わっている。

とくに弓浜半島は、砂と風と海流が造形した美しい砂州*であり、この砂州の形成史はまさにこの地域の歴史そのものでもあるからである。

まずは、地球規模の大陸形成のダイナミズムを堪能していただきたい……。



大山山頂から望む弓浜半島

なぜ弓浜半島は美しい弧を描くのか

島から半島へ

大山の山頂から日本海を望むと、中海と美保湾を隔てるように島根半島に向けて、美しい弧を描く弓浜半島の海岸線に心奪われる。全長20km、幅4km、日本最大級、さらには日本の白砂青松100選にも選ばれた美しい砂州である。

しかしこの砂州は、太古から変わらぬ風景であったわけではない。天保5年(733)に成立した『出雲国風土記*』には「夜見島」として記録されるように、中海に位置する島であった。この島が半島化したのは、約1000年前の平安時代のころといわれている。応永5年(1398)の成立とされる『大山寺縁起絵巻』(15頁章扉参照)には、ほぼ半島化した姿が描かれている。「ほぼ」とことわったのは、半島の中央部に位置する米子市和田町付近には、この地域が中世まで「大切戸」と称する海峡であったという伝承が残されており、この海峡が塞がって完全に半島化したのは近世になってからと推定されるからである。

それにしても、1000年という時間軸の中で、島であった弓浜が半島に変貌していくプロセスには、どのような自然の力が働き、その変遷する砂の大地を舞台に、人々はどのような歴史を刻んだのであろうか。

弓形の砂州を造り出した自然のメカニズム ＝地球規模での「海進*」と「海退*」

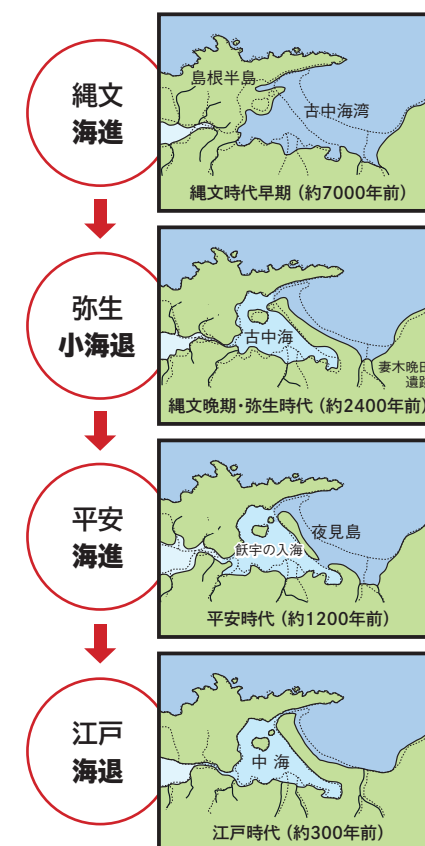
まずおさえておかなければならないのは、地球規模での気候変動と、それにもとない大きく進退をくりかえす海面の変化である。

右図は、7000年前から300年前までの、中海周辺の地形を推定した図である。

地球規模での温暖化が進んだ縄文時代早期は、海面が上昇し、中海の半島や島は水没していた。いわゆる「縄文海進」の時代である。弥生時代に入り、寒冷化が始まると、海面が低くなり、海に沈んでいた島があらわれる。こうした「海進」と「海退」の運動によって、半島は姿をあらわしたり、消えたりを繰り返してきたのである。

しかし、「海進」と「海退」だけでは、なぜ弓浜が弧を描くのか、しかも中海側に大きく湾曲したのかという謎は解けない。この謎を追って、「砂」と「海流」と「風」

の三つの要素を考えてみたい。



日野川からの砂・美保湾流 東西の強風が半島を造る

弓形の砂州を造り出した自然形成のプロセス ＝「砂」と「海流」と「風」

下図は日野川から流れ出る砂が、海流と風の作用によって、弓形に造形されていくメカニズムを表したものである。以下、その造形のプロセスをたどってみたい。

プロセス1 砂の蓄積

半島を形成する膨大な砂の多くは、母なる川・日野川から供給される。上流部の中国山地や大山から崩れて流された砂に加え、中世以降はたたら製鉄*の原料の砂鉄を採るため山を崩して鉄穴流し*をした際の廃砂（砂鉄はほんのわずかで、残りは川に流す）が砂の供給源となった。その量は2億5000万㎡（米子の全面積に高さ1.9m分）とも試算される。ボーリング調査によると砂の厚さは40mに達する場所もある。

プロセス2 海流による 砂州の形成

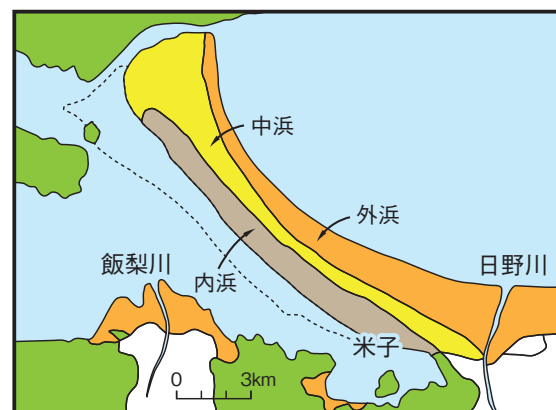
日野川河口から供給される砂は、美保湾特有の時計まわりの湾流によって境港方面に流れていき、砂州を形成する。美保湾流は下図のとおり、対馬海流*が大山町付近の突端部にぶつかり、湾に回り込むことで発生したものである。

プロセス3 風による 形成

蓄積された砂は、地域特有の強力な東（北東）風で西に飛ばされ、また同じく特有な西（北西）風で吹き返され、砂丘を形成した。風が東西で強く吹くのは、美保湾、中海・宍道湖が島根半島と中国山地の山々に挟まれた底地帯（宍道湖・中海低地帯）で、風が集束されて吹き抜けるためである。気象条件（季節風や台風など）によっては暴風となり、砂嵐が半島を覆うこともあった。



鉄穴流しの様子



弓浜半島を形成する砂州列

弓浜半島を形成する砂州列 ＝「内浜」「中浜」「外浜」

このようなプロセスを経て出現した弓浜半島であるが、長大な砂州の中央部には、標高20mの砂丘も形成されている。砂州は米子市街地を起点に中海側から内浜、中浜、外浜と呼ばれ、それらの間には後背湿地が並行して伸びる。

内浜砂州は、米子の勝田山から境港市外江に達し、縄文海進のころ形成されたとみられる。

中浜砂州は、内浜砂州の外側に形成された砂州、南端は日野橋付近を起点とする。内浜との砂丘間低地に米川が開削された。

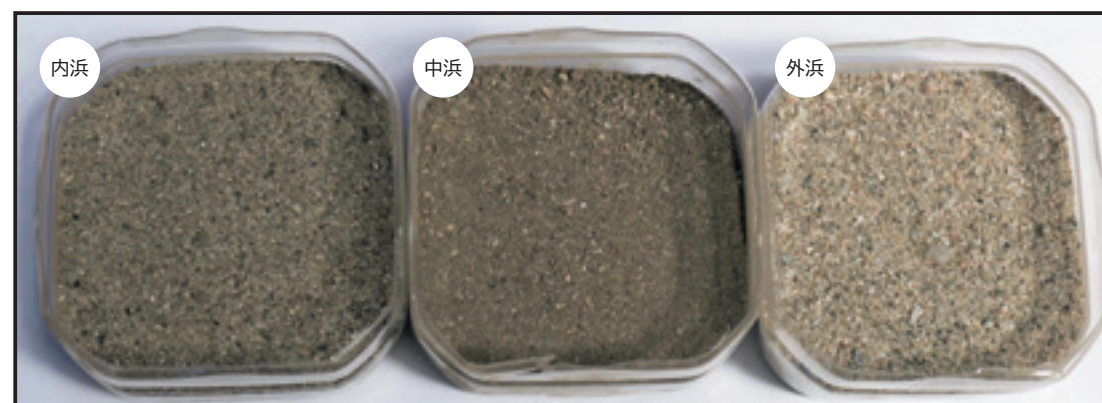
外浜砂州は、中世まで日野川河口だった淀江町の佐陀川付近から始まり境港に至る。この砂州には、たたら製鉄・鉄穴流しによる砂鉄を多く含む膨大な廃砂が堆積し、急速に形成された。

「内浜」「中浜」「外浜」の砂の違い

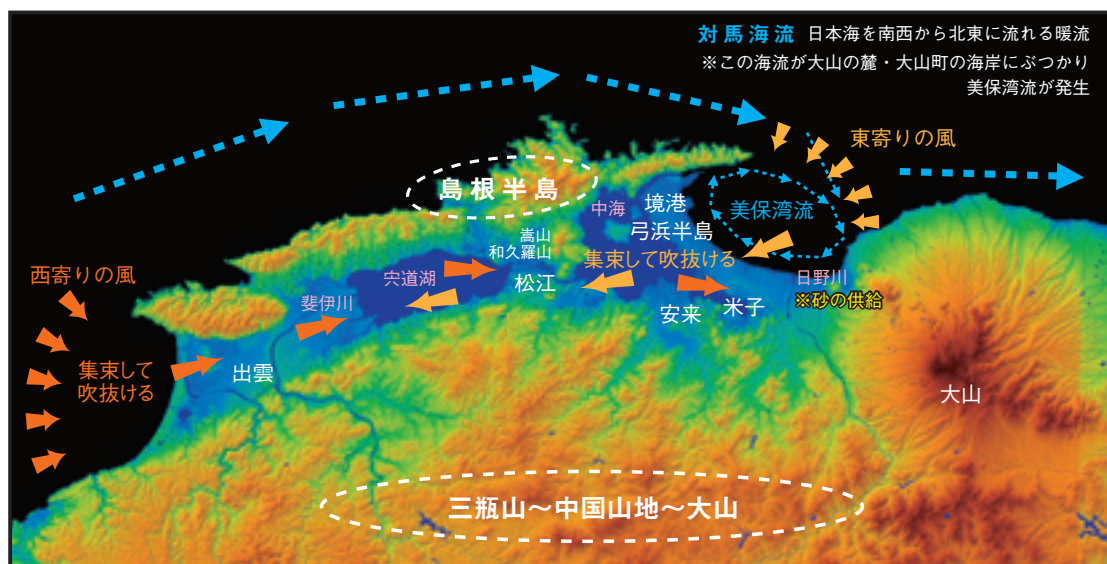
内浜・中浜・外浜というと、バスの路線がまず頭に浮かぶ。あるいは中海側から内・中・外の便宜的な呼称と考えがちである。しかし、弓浜半島の砂州の成り立ちを追うと、太古からの地形の変遷をみごとに象徴していることに気づかされる。下の写真は、左から「内浜」「中浜」「外浜」の砂である。砂の色、大きさ、砂質の違いは、見た目にも明らかである。



弓浜半島に堆積した砂鉄の層

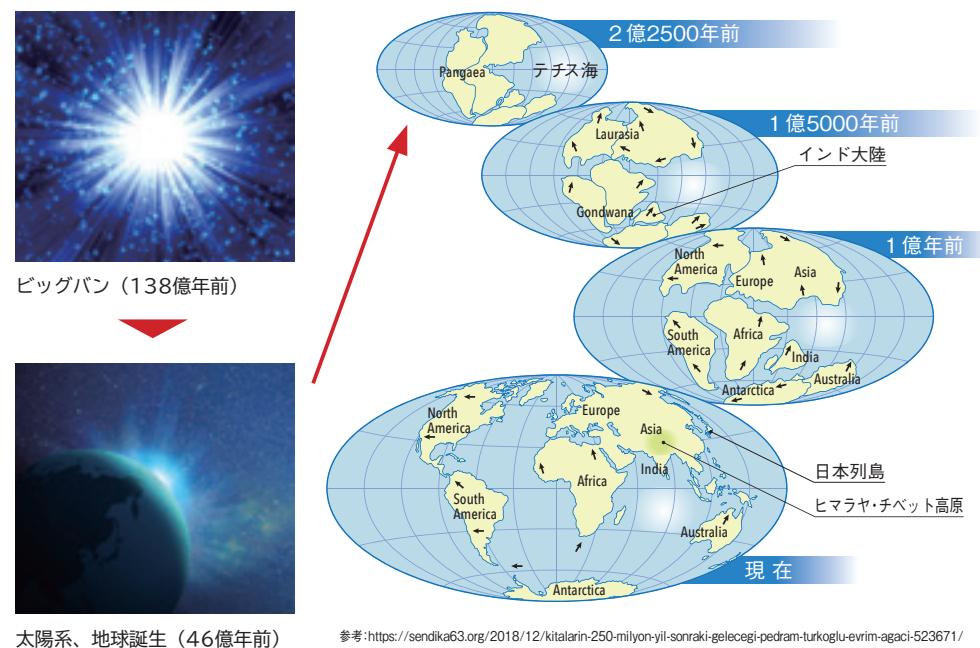


内浜、中浜は黒っぽく粒が細かい（主に大山由来の安山岩系の砂）。外浜は白っぽく粒が粗い（主に中国山地由来の花こう岩系の砂）。※ここに表示している「中浜」は地学上の区分で、境港市の地域名「中浜地区」とは異なる。



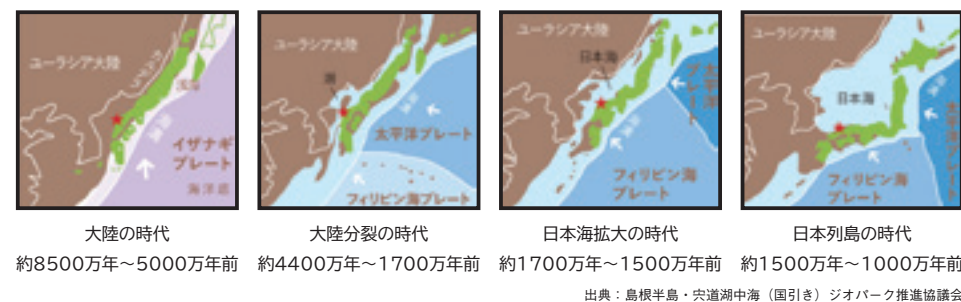
地球規模での地形の形成——日本列島が誕生するまで

地球誕生から1万年前まで（日本列島成立まで）の歴史



プレートテクトニクス 大陸の形成

地球のプレートは地球誕生後、数十億年にわたって移動しながら超大陸の形成と分裂を続けた。約4000万年前、インド亜大陸がユーラシア大陸に衝突し、ヒマラヤ山脈やチベット高原が隆起、その下にあるマントル部分に西から東へ向かう流動が引き起こされ、約2000万年前日本列島が大陸から引き離されることにつながった。



約1万年前に現在の日本列島、日本海が成立。列島の地形変化に加え、温暖化も重なり急激な海面上昇（海進）もあって、対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡などで太平洋とつながった。これをきっかけに暖流（対馬海流）が日本海へ流れ込むようになり、その影響で日本列島は温暖湿潤な気候となった。



約1万年前～現在

基礎的な地形が生まれたのは1万年前

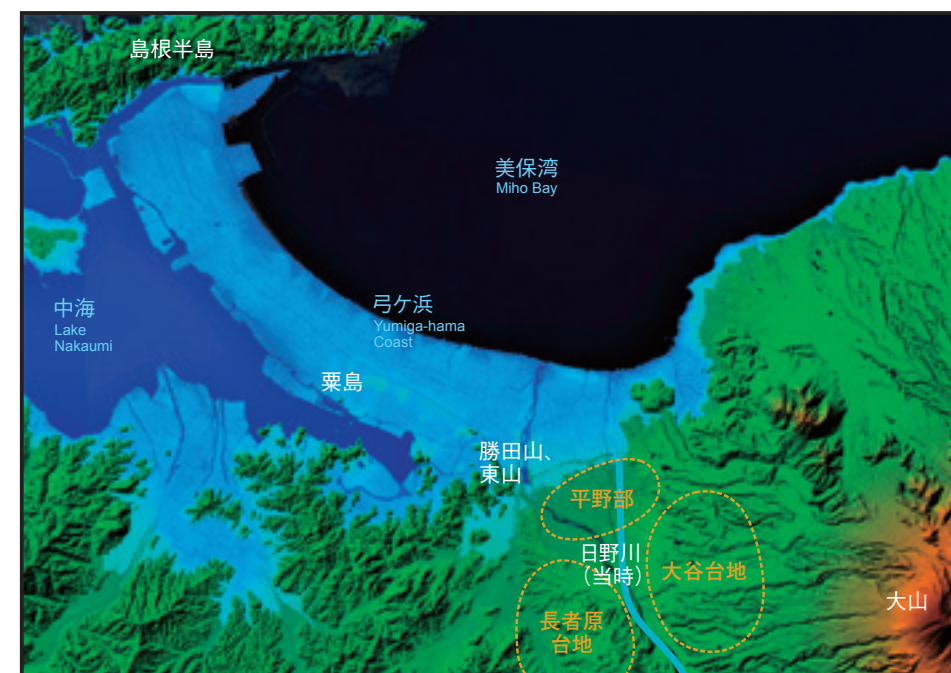
日本列島が誕生してからも、気候や火山活動などの地殻変動により、列島の地形は大きく変化している。山陰地方も例外ではなく、次頁の時代ごとの地形の変遷に示すような変化があった。

米子周辺（大山山麓の台地）に人が住み始めたのは、旧石器時代の3万年前頃とされる。その頃は氷期で、地球上で氷河が発達し、海水面が現在より100m以上低かった。そのため隠岐島とも陸続きで、当時の米子周辺は内陸に位置し、モミ、ブナなどに覆われた森の高原地帯であった。

その後、温暖化と寒冷化の小さな波を繰り返しながら、徐々に温暖化に向い、海水面が上昇していき、約1万年前に現在の日本列島が成立した。一方、同時期に大山の火山活動も収まり、米子周辺の基礎的な地形（弓浜半島形成につながる地形）がほぼ形成された。

その特徴は、大きく分けて日野川下流域に広がる平野部と、それを取り囲む丘陵部に大別される。さらに丘陵部は、大山の裾野である大谷台地に、上福万・尾高・百塚など縄文～弥生～古墳にいたる各時代の遺跡が見られ、人々の暮らしが継続的に営まれていたことがわかる。また日野川左岸には、同じく大山の噴火で形成された長者原台地が対峙するように位置し、縄文～弥生～古墳を通じての遺跡が、こしが丘・青木・福市などに濃密に分布している。

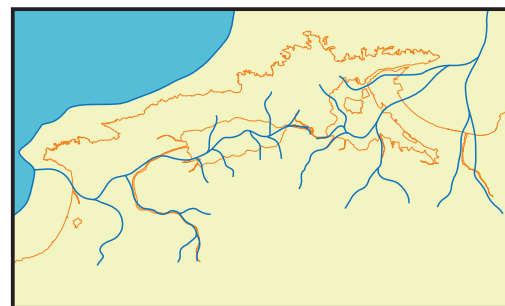
このように1万年前に、米子周辺には、現在につながる安定した生活の場が形成されていた。この「場」に、海を通じて、あるいは川を経由し、陸地を伝い、さまざまな文化が流入し、独自の歴史が刻まれていったのである。



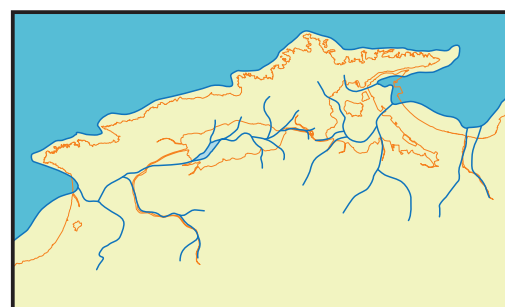
海面を13m上昇させた想定地図 当地の基礎的な地形を彷彿とさせる。

地形の変遷
— 旧石器時代から現代まで

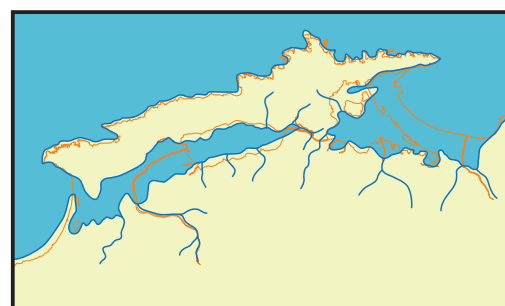
各時代の地形の変遷をたどる前に、前頁で取り上げた縄文早期以後の地形の変遷をみておきたい。



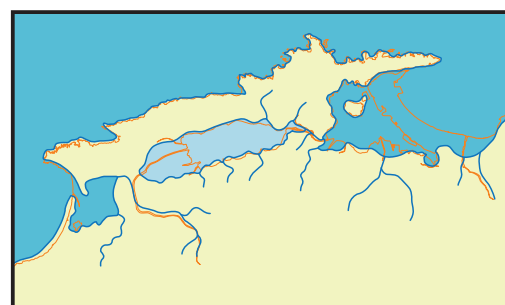
20000年前（旧石器時代）



11000年前（縄文時代草創期）



7000年前（縄文時代早期）



5000年前（縄文時代前期末）

米子周辺では旧石器時代（3万年前頃）から縄文草創期にかけての尖頭器（狩猟具である槍の先に装着）が大山山麓を中心に多く発掘されており、ヒトが住み始めたことが確認されている。山麓の火山灰台地が当時の主要な狩りの場であったことが想定される。

当時は寒冷化（氷河時代）で海退が進み、隠岐島まで陸続きであった。米子周辺は丘陵地で、日野川は隠岐方面の海へ流れていたと考えられる。

気温の温暖化（氷期が終わり、地球全体が暖くなる間氷期へ）にともない海水準はしだいに上昇して境港付近まで達するようになる。同時代、日本海が閉じられた海から太平洋と流れができる海となり、暖流が入り込み、その影響もあって日本列島の気候が大きく変わる。大山の噴火活動は同時期に収束し、現在の基礎となる地形が形成され始める。

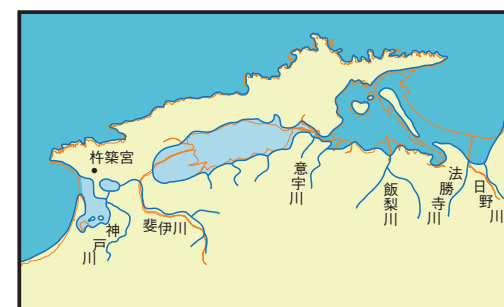
地球規模での温暖化がさらに進み、海水準が上昇し（縄文海進）、古中海湾や古宍道湖湾ができた。弓浜半島は未形成。氷期（旧石器時代）には草原だった日本列島の大地がブナやナラなどの落葉広葉樹に覆われるようになった。森には様々な木の実など食物が増え、人の生活が大きく変わり、土器を作って煮炊きをもする縄文時代と呼ばれる文化が開いた。

海水準がさらに上昇したが、古中海湾では現在の弓浜半島西縁を中軸にして、水底で砂州（内浜）の形成が始まった。内浜は6000～3000年前頃に形成された浜堤と推定されているが、日野川、法勝寺川から膨大な砂（大山や中国山地から）が供給され、弓浜半島の基礎部分が形成された。古宍道湖では斐伊川の土砂の供給によって埋め立てが進み、東西2つの水域に分かれていった。

※弓浜半島形成は島根半島の存在と深い繋がりがあり、中海・宍道湖圏域の地形変遷図を使用。



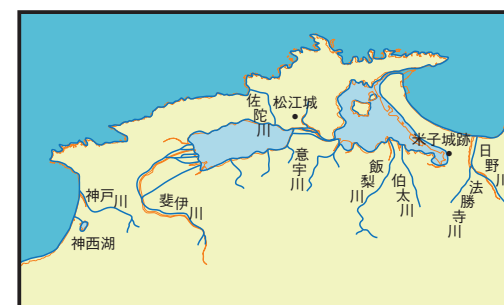
2400年前（縄文晩期～弥生時代）



1200年前（奈良時代）



300年前（江戸時代）



100年前（大正時代）

気候がやや冷涼化していった海水準がわずかに下がり（弥生小海退）、弓浜砂州が出現し、古中海湾は潟湖となった。中浜は3000～2000年前頃に形成されたと推定される。弓浜砂州の先端部（境港：中浜部）では弥生時代の遺跡が複数残る。砂州の付け根部分の砂丘地（米子市錦町、博労町など）、また大山山麓など周辺の丘陵地に同時代の遺跡が数多く残る。

海水準がやや高くなり（平安海進：8～12世紀）、半島中央部付近から海が侵入して古中海は再び湾へと戻り、猊宇の入海（※万葉集）と呼ばれた。同時期に成立の出雲国風土記には弓浜砂州は夜見島と記述される島であった。砂州の付け根の米子の博労町遺跡から貴族が身に付けた腰帯具や墨書土器が出土したことから、奈良～平安時代には役所関連の遺構があったと推定される。

夜見島と本土側の間は繋がったり離れたりを繰り返してきたが、平安時代以降は弓浜砂州（半島）が固定し、中海ができた。中世より盛んに行われた日野川流域でのたたら製鉄が江戸時代以降はさらに規模が大きくなり、それによる土砂の流出が増え外浜が形成された。外浜は1000～100年前に形成された浜堤。1590年代より米子城築城、城下町形成が始まる。半島の砂丘地の開拓が進む。

約100年前にはたたら製鉄の操業が終わり、土砂の流出が減ったことで現在の半島の形がほぼ固定化する。その後、砂防ダムなどの建設も加わり、日野川からの流出土砂がさらに減少し、半島の基部である皆生温泉付近では海岸浸食が深刻化する。約50年前より、離岸堤を設置し砂浜を回復させる。中海側では干拓事業、境港の美保湾側では用地造成で埋め立てが行われる。

旧石器・縄文・弥生の時代

地域の歴史 1



現在の米子周辺の地形は、大山の火山活動（約100万年～約1万年前）などによって形成されたものである。この地形を舞台に、長い時間をかけて、旧石器・縄文・弥生・古墳の文化が形成されていった。

なかでも弥生時代は、朝鮮半島南部などの「水田耕作」の技術を受容することによって、自然経済に依存していた社会を生産経済の社会へと革命的に飛躍させた時代であった。

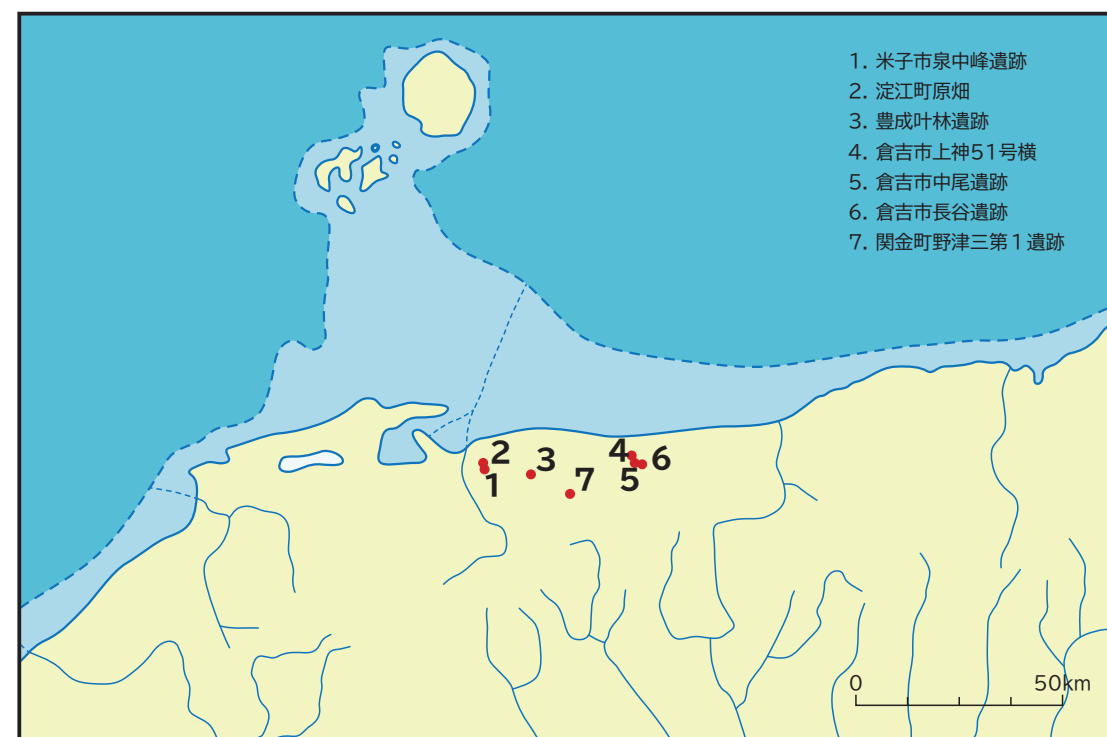
米子地域の弥生文化は、海に接していた目久美遺跡から始まる。

そこから地形にそって、現在の国道180号を辿り、南部町方面へ、もう一方は、現在の国道181号を経て、長砂・宗像・法勝寺川流域へと展開していった。

まさに地形に促されるように……。



妻木晩田遺跡 洞ノ原から弓浜半島を望む



※上図は、旧石器時代の地形を点線で示し、現在の地形を太線で示し、そこに遺跡分布を重ねたものである。
旧石器時代においては、隠岐島は本土と陸つづきであった。

旧石器時代

現在、日本列島で確認されている最古の人類が営んだ時代を旧石器時代と呼んでいる。下限は縄文時代が始まる約1万2000年前であるが、その上限について50万年前ともされており、現在のところ定説はない。しかし後期旧石器時代については、3万5000年～3万年前以降、縄文時代までの時代にあたる。

上図は、山陰における旧石器時代の遺跡分布図である。鳥取県では、米子市で泉中峰遺跡、淀江町原畑、西伯郡大山町で豊成叶林遺跡、倉吉市で4か所の計7か所が発見されている。大山を中心に東西の裾野に分布しており、山麓の火山灰台地が当時の主要な狩りの場であったことが想定される。

旧石器人は石器づくりのプロフェッショナルといわれ、打ち欠きや剥離などの加工を施した高度な石器を作っている。石材としては黒曜石*・メノウなどが多い。黒曜石は隠岐産で、当時陸続きであったことから、徒歩での交流が想定される。またサヌカイト*の可能性のある安山岩も見つかっており、山陽・瀬戸内方面との交流もすでに始まっていたと考えられる。

縄文時代

縄文人の遺跡と暮らし

縄文時代は約1万2000年前から2500年前まで、約1万年間も続いた長い時代。きびしい寒さが続いていた氷河期が終わり、温暖化へと移り変わった。また暖流の影響もあり今より温暖な気候で、大地がブナやナラなどの落葉広葉樹に覆われるようになった。森には様々な木の実など食物が増え、人々の生活が大きく変わり、土器を作って煮炊きをもする縄文時代と呼ばれる文化が花開いた。

米子周辺では目久美遺跡、青木遺跡、淀江町の鮎ヶ口遺跡などに加え、大山の山麓など周辺の丘陵地で多くの縄文遺跡がある。目久美遺跡は低地遺跡として、縄文時代から中世に至る遺物の重層する遺跡。青木遺跡では当時のケモノ道に沿って作ったとみられる動物捕獲用の落とし穴が多数見つかった。鮎ヶ口遺跡からは、6000年前の土器、石器、木製品などが大量に出土。旧淀江湖岸の遺跡であり大量の石錘（石のおもり）が出土していることから、漁撈を主体とした人々の村跡であったことが想像される。それに続く大山山麓のなだらかな洪積台地（岡成原、喜多原など）には、縄文～古墳時代の集落跡が多数発見されている。

縄文海進

縄文時代の地形を考える場合、やはり気候の温暖化による海面の上昇を念頭に置く必要がある。約1万年前に始まり、7000年～5000年前に最盛期を迎えた現象で、現在より5m海面が上昇したといわれる。しかし米子周辺では、粟島や湊山公園の清洞寺跡地に見られる貝類の痕跡から、約2m上昇していたと推定される。それでも、内陸部に相当な入海が侵入していたと思われる。その後、6000年前の縄文前期から、海退に転じ、縄文晩期から弥生前期にかけて海面は現在より1～2m低くなった。



海面を6m上昇させた想定地図

6000年前は縄文海進で海水準が上がり、中海（湾）や宍道湖が誕生し、上図に近い地形状況になっていたことが予想される。

弥生時代

水田耕作の伝播が弥生時代を開いた



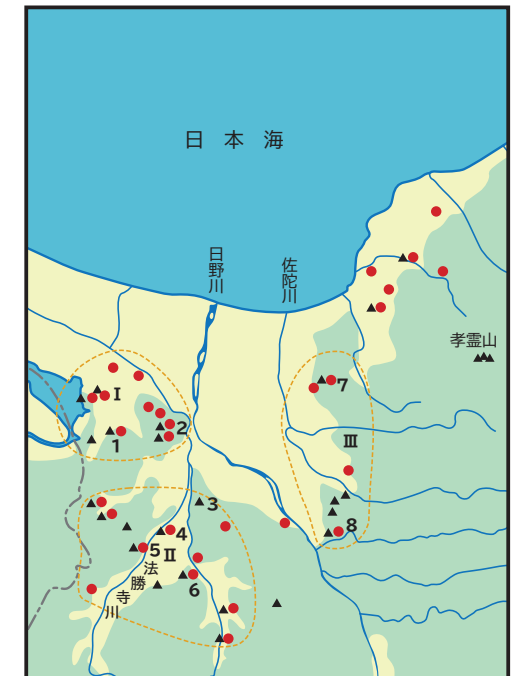
縄文時代の晩期には、すでにイネを含んだ穀類の栽培農業は始まっていた。しかし畑作を基礎とする縄文農業には、自ら時代を変えるエネルギーは生み出せなかったと思われる。

朝鮮半島南部などから伝わった水田耕作技術によって、弥生という新たな時代が切り開かれていった。水田の経営・維持には協同作業が不可欠であり、家族単位、村単位の集団が形成され、やがてそれらがクニに成長していくのである。

弥生人の好んだ地形

弥生時代に入ると、小海退（約2m海水面が下降）により、しだいに入海が引き、弓浜砂州が出現、また周辺の丘陵部の周りに低湿地が出現した。この砂丘の後背地に生じた低湿地こそ、水田耕作技術を携えて日本海を東に移動してきた弥生人のもっとも好んだ土地であった。

米子周辺の最初の弥生遺跡とされる目久美遺跡（縄文～弥生の複合遺跡）はその条件にピッタリの土地であった。この遺跡を起点に周辺部では多くのムラが成立した。代表的な陰田、青木、福市、越敷山、そして国史跡に指定された大規模な高地性集落・妻木晩田遺跡などである。また現在の市街地周辺でも、錦町第1遺跡（ふれあいの里）、博労町遺跡（米子工業高校）、米子城城下町遺跡（医大通り）など砂丘地から重要な遺跡が見つかっており、当時の海岸部を形成するそれらの遺跡が弥生文化の玄関口の役割を果たすと同時に集落の形成に展開していったと思われる。



米子平野及び周辺の縄文晩期・弥生前期の遺跡分布図
○で示す範囲、I＝第一地域、II＝第二地域、III＝第三地域

1.目久美遺跡、2.長砂遺跡、3.青木遺跡、4.大袋丸山遺跡、5.福成早里遺跡、6.天萬土井前遺跡、7.泉中峰・泉前田遺跡、8.久古第3遺跡

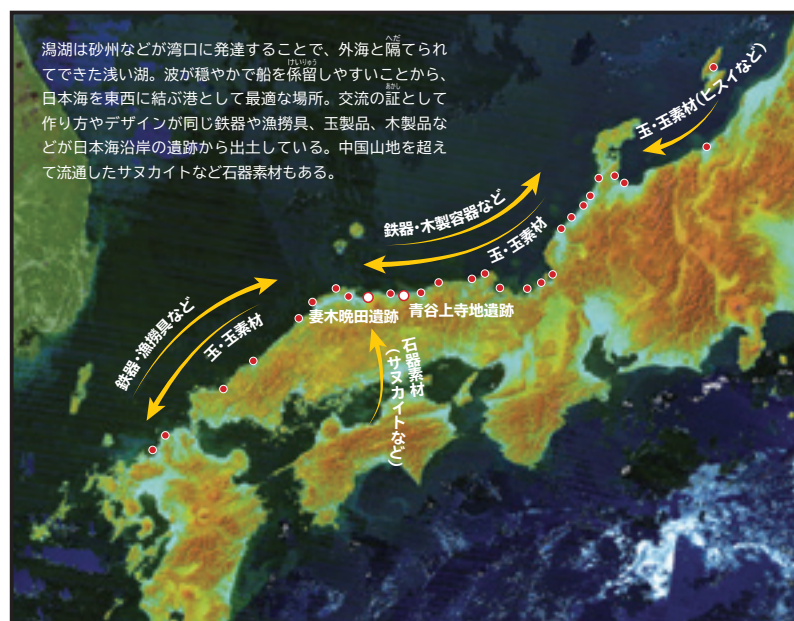
弥生の日本海を 舞台にした広域交流



すみだ いせき
角田遺跡（米子市淀江町）出土の
弥生土器に描かれた船と高床建物

縄文晩期に伝播し、弥生に広まってきた稲作は社会を大きく変えた革命だった。稲作農耕とともに、鉄器が付属物のように入ってきたが、農具のみならずさまざまな道具（鉄器や加工用道具など）をもたらした。鉄の道具を使って大地を開墾し、稲を管理、育成する生産は安定的な収穫をあげた。船を造り交易もさかんになった。生産性は伸び、人口の増大をひきおこした。

妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡はさまざまな加工用具の遺物が発見されているが、日本海側に点在する潟湖（ラグーン）*を手漕ぎ船でネットワークする広域の交易、交流が行われ、各地の特産品が直接、また加工を加えられ間接に取り引きされ、さながら加工貿易の様相も呈していた。



潟湖でつながるムラとムラ。図中の赤点は潟湖のあった所

弥生時代の前期と後期との遺跡の在り方を比較すると、日本の人口は激増（推定で約8万人→約60万人）したことがわかっているが、大陸から伝わった稲、鉄、そして交易、渡来人は日本の社会を大きく変えた。

その玄関口は、最も大陸に近い九州はもちろん、対馬海流にのってくと到達する山陰（中海宍道湖エリア）も重要なゲートウェイだったに違いない。離岸堤のように横たわる島根半島の南側は穏やかな入海がひろがった巨大な潟湖で、沿岸には、稲作をするのに相応しい大地が広がり、そして太陽が昇る東には見事なカタチをしたシンボル・大山がそびえており、荒れた海を渡ってきた渡来人たちにとってパラダイスだったのではないだろうか。

地域の歴史2 古代の弓浜 — 見えてきた半生郷 —

邪馬台国論争は九州か、大和か、いまだに結論をみないが、日本列島を統一した大和王権が纏向遺跡*（奈良県桜井市）から始まったことは、誰しも認める定説となっている。



3世紀、この地に誕生した王権は、たちまちのうちに全国各地をその支配下に置いた。そのシンボルとなったのが前方後円墳である。米子周辺にも多くの古墳が築かれた。

この古墳時代を経て、7世紀から8世紀にかけて、律令国家*が成立し、米子周辺は、伯耆国会見郡（米子市・境港市・伯耆町・南部町）・日野郡（日南町・日野町・江府町・伯耆町の一部）・汗入郡（旧淀江町・大山町）に編入された。また郡内には郷や里が誕生した。

一方、この時代になると、文字による記録が始まり、それらによって、当時の人々の生活をより深く理解することが可能になってきた。

この章では、まず文字による記録から地形を復元し、さらに新たな発掘により明らかになった砂丘下の遺跡を通じて、謎とされてきた「半生郷」（呼び名不明）の実態を見ていく。



大山寺縁起絵巻の弓浜半島図（1398年）

神話は地形の変遷をどう語ったか？

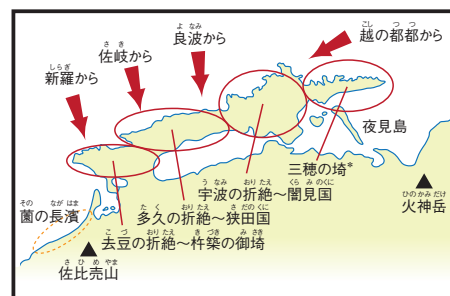
『出雲国風土記』

国引き神話に見る弓浜

『古事記』『日本書紀』、各国風土記などに記録された神話は、歴史的
事実を伝えるものではない。しかし神話の断片をくわしく見ていくと、
地形の成り立ちや、同時代の人々が地形や地域についてどのようなイ
メージをもっていたのか、それらを知る貴重な情報を与えてくれる。

天平5年(733)に成立した『出雲国風土記』の冒頭には、新羅*や隠
岐、北陸の国々を引いてきて、島根半島が形成されたという壮大な国引
き神話が記録されている。

この神話の最後の舞台は美保関。大山(火神岳)を杭にし、夜見島を
綱にして、はるか北陸の能登半島から国を引き、美保関が形づくられた
というもの。ここで弓浜半島が「夜見島」として登場している。おそら
くは古く内浜が形成され、そこに日本海の海岸部の砂が蓄積し、中浜が
形成され、美しい弧を描き始めた頃の景観が生み出した神話であろう。



出雲国風土記「国引き神話」

再生の国＝伯耆 大国主命の物語の舞台

これらの神話のイメージに影響を与えているのが記紀神話、ことのほか『古
事記』の神話である。記紀は国譲りの舞台を出雲に設定するが、その理由は諸
説ある。重要なのは、日昇る伊勢に對置する日沈む出雲という方位感覚であろ
う。これにより山陰全体が、神話世界において黄泉の国*として認識されていっ
たと思われる。そして『古事記』は以下のような神話を展開するのである。

- イ) まずは伯耆と出雲の境の比婆山にイザナミ命*の墓を設定。この地を「母の国」「黄泉の国」とした。
- ロ) これにより、母を求めてササノオ命*が鳥髪(とりかみ)の峰(みね) (船通山)に降り立つ必然が生まれる。
- ハ) 一方、大国主命*は因幡(いんぱん)からの帰路、手間の地(現南部町)で遭難し、女神たちの治療により再生する。
この神話の背後には、古代における「火傷薬」による治療法があったといわれる。
- ニ) さらに根の国*に追い込まれた大国主命には、根の国の王・ササノオ命の繰り出す多くの試練が待ち受
けていた。これらを潜り抜け、黄泉平坂からこの世へと生還する。現在の松江市東出雲町の辺りである。

このように、大国主命の神話は、死と再生を繰り返し、再生することにより大きな神、あるいは王
へと成長していく物語。一方、粟島伝承に登場するスクナヒコナ命も、穀霊の神、薬草の神など多彩
な性格をもつ神である。出雲東部から伯耆西部の地は、当時の医療や薬学における先端地域であり、
新たな命の再生と治療の場であった。

その意味では、現代の医療都市・米子にふさわしい神話といえるであろう。



手間の地・赤猪岩神社

『伯耆国風土記』逸文*が語る「常世の国・弓浜」

一方、伯耆の人々は弓浜半島をどう見ていたのだろうか。
『伯耆国風土記』逸文には、弓浜の付け根に位置する粟島
について、以下のような貴重な情報を記録している。

- イ) 粟島は、相見郡*の郡家の西北の方角にある余戸*の里に
位置する。
- ロ) スクナヒコナ命*は、粟を蒔き、実った後、粟に乗って
常世の国に弾かれて渡った。故に粟島という。

さりげない情報であるが、汲むべきことは多い。まずは、
今は陸続きの粟島が、島であったこと。そこには『出雲国
風土記』が「夜見島＝黄泉の島」とするイメージに呼応す
るように、死者が行き着く「常世の国*」にまつわる伝承
が記録されていることである。



弓浜半島の夕暮れ(大山中腹から望む)

米子の地名と砂と —見えてきた会見郡半生郷—

『和名抄』に記録された
会見郡の郷名

平安時代に成立した『和名抄*』
(平安時代に成立した辞書で全国
の国・郡・郷が記録されている)
によれば、会見郡は「安不美」と
あり、ミ=海、すなわち中海を意
識した郡名であったと思われる。
郡内に宗形神社*や安曇*郷など
海の民に関わる痕跡も濃厚に分
布する。

会見郡家は前述した『伯耆国風土記』逸文にあるように、粟島から見て
東南に位置していた。諸説あるが、現在では、伯耆町(旧岸本町)坂長辺
りの長者屋敷遺跡が有力地。しかしこの地域の古墳時代の首長墓の変遷を
見ると、必ずしも固定的に考えるべきではないのかもしれない。『和名抄』
によれば、この郡には12の郷があった。「日下・細見・美濃・安曇・巨勢・
蚊屋・天万・千太・会見・星川・鴨部・半生(読みの定説なし)」である。



会見郡内の郷分布図(推定)



博労町遺跡（米子工業高校敷地内）

「半生郷」とは？

会見郡12郷の内、「半生」が謎の郷とされ、郷域や呼び名も「はんしょう」「はんにゅう」などがあり、定まっていない。従来、この「半生」の「半」を「米」の誤字として、「米生」を米子地名と関連付ける試みが行われてきたが、否定的な見解も多かった。「米子」という地名については、岩佐武彦氏の「米子地名考」に代表されるように「ヨナ」を砂、「ゴ」を所と解し、長砂・観音寺・東山・勝田山とつづく山塊ラインから弓浜基部に向かって堆積した砂丘状の地形に由来する地名と考えられてきた。さらに砂地であるこの地域は、余戸程度の数戸の集落形成がcaろうじて可能な不毛の地とする見方も根強くあった。

砂丘地の遺跡から見えてきたもの

ところが最近、米子市内の発掘調査が急速に進み、砂丘地から重要な遺跡があいついで発見され、この地域の再評価が始まった。無論、半生と米子を短絡することは慎まなければならないが、半生郷の実態が見えてきたのである。

具体的な遺跡としては、錦町第1遺跡・米子城城下町遺跡・博労町遺跡など、半生郷内と推定される遺跡である。とくに博労町遺跡は、弥生時代終末期から近世以降にわたる複合遺跡で、長期の安定した集落であることが明らかになった。その概要を調査報告書から要約すると、右のとおりである。

イ～ニを見れば、弓浜から米子市域のかつての砂丘地の歴史的変遷がみごとにたどれる。古代においては、この地域には弓浜部に余戸の里、米子海浜砂丘域には半生郷が成立し、ある時期は会見郡家、あるいはその関連施設が設けられるなど、郡内においても中核的役割を担っていた。やがて中世になると、畠に転換する。おそらくはこの時期に成立した「勝田庄」に繰り込まれていったのであろう。

イ) 古墳時代前期を中心とする大規模な集落の存在が確認され、当時の豪族の屋敷跡もみつかった。大量の土錘、石錘や舟形土製品などの出土遺物から、この集落の生業が漁撈や交易といった海と密接に関わるものであったと考えられる。

ロ) 奈良時代から平安時代前期にかけての大型掘立柱建物跡は、今まで不明とされてきた会見郡内の郷家、もしくはその関連施設である可能性が高まった。

ハ) 中世になると、この地域をふくむ米子海浜砂丘域一帯が大規模な畠へと変貌する。この背景には、荘園*開発などといった大きな政治的な要因が推定される。

二) 近世末から明治初期の多数の井戸と溝状遺構が見つかった。近代以降砂丘地帯では綿の栽培が盛んとなり「伯州綿」が特産品となっていくが、「綿井戸」とも呼ばれる素掘りの井戸の存在は、近世末に綿栽培が始まっていたことを物語る。



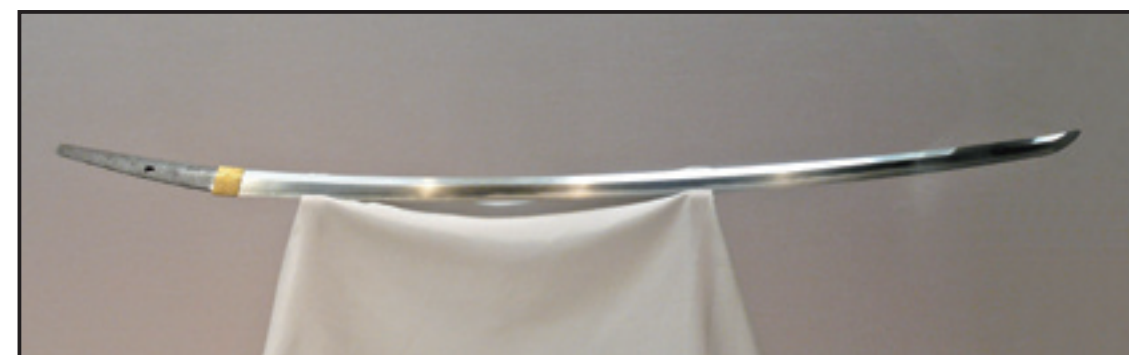
米子市周辺遺跡分布図

地域の歴史3 製鉄王国・伯耆の誕生と 弓浜半島の完成

中世になると、公地・公民を基礎とする古代の律令制が崩壊し、各地に荘園が成立してくる。米子周辺でも、三野御厨（米子市箕）・富田庄（南部町）・長田庄（南部町南部）・星川庄（南部町市山・宮前・浅井）などが成立。前章で見た「半生郷」「余戸里」は「勝田庄」に編入され、新たな歴史を刻むことになる。

この勝田庄の歴史の舞台は、前述したとおり、日野郡における「たたら製鉄」によって大量に排出された砂が日野川を下り、美保湾に出て、さらに海流と風によって、内浜・中浜の砂州の外側に蓄積されて形成された。このように自然地形を変貌させるほどの「たたら製鉄」とは、一体何なのか、あるいは「たたら製鉄」が伯耆国の産業構造をどう変えていったのか、その歴史を辿ってみたい。

まずはこの地の製鉄技術がどこから伝わったのか、さらにこの地域の中世史—源平の争い、後醍醐天皇*の挙兵などに名を残す武将たちと鉄との関係についても推察してみたい。



大原安綱の刀

弓浜半島を完成に導いた たたら製鉄の歴史



アイアンロード

製鉄略史

約4000年前ユーラシア大陸の西端ヒッタイト（現在のトルコ）で人工鉄が作られて以来、長い年月をかけ大草原や山岳地帯などを経て大陸東端の中国、朝鮮半島へ伝わり、さらに日本へ伝わった。各地に「鉄」を伝えた道は「アイアンロード」と呼ばれている。

日本への鉄伝来は、紀元前4世紀の弥生時代、朝鮮半島南部から伝わってきたとされる。中国の史書『魏書』東夷伝弁辰条には、朝鮮半島南部の弁韓*や伽耶*で産出される鉄を、倭人らが交易によって得ていたという記事が記録されている。

この交易を独占していたのが伊都国・奴国*を中核とする北九州の勢力であった。彼らは鉄のネットワークを形成し、日本海沿いに山陰・丹後・北陸と繋がり、鉄を分配することにより、各地のブランド品の獲得や政治的な協力体制を拡大していった。山陰においては妻木晩田・青谷上寺地などの鉄製品の素材は、このネットワークにより北九州を経由して得たものであった。



たたら製鉄イメージ

製鉄王国・伯耆の誕生

8世紀以前には始まっていたであろう伯耆の鉄生産は、平安時代に入ると、全国でも有数の製鉄の国として認識され始めている。

平安時代初期の9世紀には伯耆国から調、庸*として鉄錠や鉄*を中央に差し出した記録が、『延喜式』（平安時代中期に編纂された格式（律令の施行細則））にみえ、また『平安遺文』には、1073年から20年間に東大寺封物として4340錠もの鉄を全国のなかで伯耆国のみ差し出していることが記録されている。

近年、山陰道建設の際の発掘調査で、大山北東部の東伯耆で22か所もの農具など生産する鍛冶遺跡が発見されたが、高速道になった地面だけでこの数ということは、全体では相当数の鍛冶場があったことが想像できる。まさに製鉄王国・伯耆の誕生である。

伯耆はどうして製鉄王国になれたのか？

前述したように古代の鉄生産は吉備を中心に開始されたが、吉備地方の鉄の原料は、鉄鉱石、あるいは砂鉄との混合を主流とした製鉄であった。しかし時代の変化とともに、良質の鉄が求められるようになり、その素材として、中国山地の豊富な砂鉄が着目されたのである。

砂鉄は主に花こう岩に含まれているが、中国山地に多く見られる花こう岩は約1億年前から始まったアジア大陸東縁での造山運動によって、数千万年かけて形成されたものと考えられている。日本列島の原型が誕生する500万年前頃から段階的な隆起が始まり、中国山地が誕生。時代が下り、山地を構成する花こう岩が風化して分離したのが砂鉄である。

山陰側と山陽側では花こう岩に含まれる磁鉄鉱の量の違いがあり、砂鉄は“真砂砂鉄”、“赤目砂鉄”と区分された。山陽側の赤目砂鉄は還元しやすく（鉄を造りやすい）、山陰側の真砂砂鉄は還元しにくいけれど品質の良い鉄が出来た。中でも伯耆、出雲、石見は古代より近世に至るまで良質な真砂砂鉄を使ったたたら製鉄が盛んに行われ、江戸時代後期より明治時代半ばまで日本一の鉄生産を誇る地域となったのである。

平安時代には、名工と呼ばれる伯耆安綱やその一門によって優れた日本刀が生み出され、このうち「童子切安綱」で知られる太刀は国宝に指定されている（※詳細は23頁参照）。

近世～近代には山間地域を中心に、大規模な鉄穴流しやたたら製鉄が行われ、伯耆地方の産業や経済を支えた。製鉄や鍛冶に関する遺構や地名・伝承が今なお多く残されているが、歴史的にみて、伯耆は鉄との関わりが大変深い地域であった。



江戸時代鉄山業稼業地帯図

日本における製鉄の開始は？

では日本における製鉄はいつから始まったのであろうか。現在、もっとも古いとされる製鉄遺跡は、6世紀前半の広島県カナクロ谷遺跡、戸の丸山遺跡、島根県今佐屋山遺跡などである。しかし広島県三原市の小丸遺跡は、3世紀、すなわち弥生時代後期にさかのぼる製鉄遺跡の可能性があり、今後の調査が期待される。

いずれにしろ、5世紀から6世紀にかけて、吉備*を中心に製鉄が活発化し、また丹後の遠所遺跡でも6世紀後半の製鉄コンビナートが形成され、琵琶湖周辺でも多くの製鉄遺跡が営まれた。

伯耆における製鉄の開始

一方、伯耆国では、日南町神福中野遺跡で8世紀前半の堅穴建物跡で製鉄にともなう鉄滓*が出土しており、今のところ8世紀代から鉄生産が行われていた可能性が高まっている。また倉吉市関金町にある勝負谷遺跡は、8世紀後半の製鉄遺跡である。いずれも吉備に接する地域に位置しており、おそらくは吉備の製鉄集団が、良質な砂鉄を求めて、中国山地を越えて、伯耆や出雲への進出を図ったと思われる。

日野川の鬼伝説と 中世伯耆の製鉄王たち

日南町の三国山から日本海にむけ流れ出す日野川の流域には、楽々福と書いて「ささふく」と呼ぶ神社が12社鎮座し、周辺にはササフク神の鬼退治の伝説*が語りつがれている。祭神は各社によって微妙に異なるが、孝霊天皇*・大吉備津彦命・若吉備津彦命など、吉備系の神々が祀られている。

この神社群のルーツは、岡山県岡山市に鎮座する吉備津神社と吉備津彦神社である。『古今和歌集』に「まがね（鉄）ふく吉備の中山」と歌われたまさに古代の製鉄の中心地に祀られている。おそらくは孝霊天皇に象徴される吉備の人々、しかも製鉄の技術を携えた人々が、高梁川―日野川ラインに沿って伯耆へ進出した歴史が、楽々福神社の鎮座と鬼伝説の流布となったと考えられる。

ところで、伯耆の豪族といえば紀成盛*がとくに有名であるが、「会東郡*地主」を名乗る彼の権力の背景については必ずしも明らかではない。

ところが、前述したササフク神の鬼退治の伝説に、紀氏は深く関わっているのである。紀氏の来歴を書いた『紀氏譜記』（江戸時代中期、進氏作成）には、孝霊天皇が鬼住山（伯耆町宮原）の鬼を退治した際、息子の鷲王を大將にし、家来に進大連を従えて、鬼と戦ったという伝承を記録している。進大連は紀氏の同族である。これは製鉄への紀氏の関与を示すものと考えられる。

紀成盛は「海六*」を自称し、この地域の海の航路を掌握していたと思われるが、さらに鉄を支配することによって、紀氏の勢力基盤が築かれていったのであろう。

このような視点で見れば、日野の数少ない豪族たちもまた製鉄王であった可能性が高い。『源平盛衰記』には、平家方の武士として「小鴨基康（伯耆東部・倉吉付近の武将）、村尾海六（紀成盛の別名）、日野義行」の名が見える。当時、日野郡司*であった日野氏は、黒坂の要害山城を居城として、村尾氏（紀氏同族）と比肩される有力豪族であった。

また日野町金持を本拠地とする金持氏も、「大山寺縁起」に大山の宝殿を造営した金持広重の名がみえ、金持氏が鎌倉初期には伯耆国守護*に任じられていたとされる。



東楽々福神社（日南町宮内）

日野氏、金持氏ともに日野郡を根拠地とするが、かれらの権力基盤を考えると、豊かな農業生産を背景に成長したとは考えがたい。やはり日野郡の特性である製鉄にその基盤があったと思われる。

かれらは、南北朝期には名和氏とともに船上山の合戦に参戦、功を挙げている。これら後醍醐天皇*を支えた山陰の武士たちは、まさに製鉄王たちの集合であったと思われる。



楽々福神社と関連社分布図

大原安綱伝説を歩く

日本刀の名作はなぜ伯耆で始まったのか？

数ある日本刀（太刀）の中で、とくに名刀といわれる「天下五剣」のうちの振り「童子切安綱」は国宝に指定され東京国立博物館に収蔵されている。日本刀の世界では神の域にあるともいわれ、最高の刀とされる。現在、日本刀に萌える“刀剣女子”を中心に全国的に日本刀ブームとなっており、この「童子切安綱」に心を寄せるファンが急増している。海外でも日本刀のファンは多く、世界的にも注目されつつある。ちなみに「童子切」とは物騒な号だが、凶賊退治の名刀が酒吞童子伝説*に結びついたものと考えられている。

この名刀のルーツを探っていくと、大山を抱き込むように流れる日野川地域との深いつながりが浮かび上がってくる。『太平記』（1370年頃成立）では「伯耆国会見郡の大原五郎太夫安綱という鍛冶が一心清浄の誠で鍛え、時の将軍・坂上田村麻呂にこれを奉じたものだ」と記述されている。

伯耆国会見郡は大山の西麓一帯で、日野川水系が国会見郡といっても過言でない。実際の場所（大原）については諸説あり確定できないが、大山の山麓を含む日野川水系のどこかであったことは間違いなさそうだ。日本刀で特徴的なのは反りと鑄造り*。刃を外周として弧状（弓形）に反らし、さらに強度を損なわないように刀身の背側にあたる棟に沿って小高い線の鑄を通してデザインされた。実に軽く、振り回しやすいということだが、この革新的な反りのある日本刀を考案したのは安綱ということ。当地は日本刀のルーツであることは間違いなさそうだ。



国宝・童子切安綱

伯耆国大原の安綱が作刀した名刀。安綱は平安時代に活躍したとされる刀工。



安綱伝説の地は大山の山麓に4か所あるが、それぞれに云い伝えなどがあり、場所は特定できない。太平記に国会見郡と記されているが、安綱の時代から約400年後に著された南北朝時代の軍記物語でもあることを勘案すると、南北朝時代の伯耆国会見郡のたたら製鉄や作刀技術集団の情報が下敷きになっている可能性がある。



1398年に描かれた弓浜半島

島根半島方面より大山側を鳥瞰した絵図。日本刀を彷彿させる形をしているのは偶然か。

砂との闘い — 米子市北部と弓浜の開拓

地域の歴史4

古代の「半生郷」から中世の勝田庄へ歴史をたどってきたが、米子と弓浜の本格的な開拓が始まったのは近世になってからのことであった。

しかしその開拓の歴史は、押し寄せる膨大な砂との闘いを意味した。その逆境をプラスに転換したのは、村人たちの先駆的な試みと、たゆまぬ日々の労働、そして米川の開削であった。



米子城跡から望む弓浜半島

米子城下の形成と弓浜半島



伯耆国絵図（部分）鳥取県立博物館蔵

江戸時代前半 1600年代の米川開削前の古地図
当時の村は主に半島北部（境港側）に集中し、中央部より米子側は未開発の砂丘が広がっていたことがわかる。



中世より砂州が成長し半島が形成されていたが、半島中央部は砂丘が連なり、江戸時代以前は未開の砂の大地が広がっていた。

木々も少なく、強風が吹けば砂嵐になるようなところで、一部の海岸域を除いて、集落もなかった。米子は海岸部（現在の灘町周辺）には小さな町があったが、本格的な町の形成は1590年代に吉川広家が米子城の築城を開始したことに始まる。

当時の米子市街地周辺の地形は加茂川周辺の低地と北側（北西～北東）に広がる砂丘で構成され、城下町は湊山（城山）の麓から加茂川周辺の低地に形成された。砂丘と低地の境には寺を配置（寺町）し城下町の外郭とした。

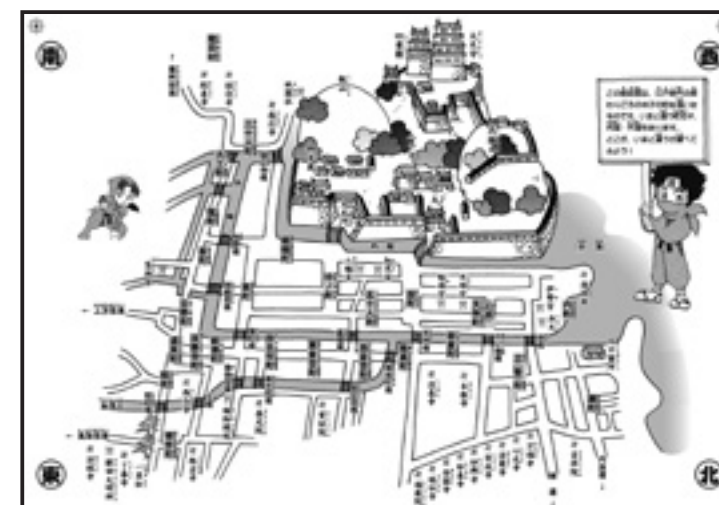
左図は現在の米子市街地の標高の南北断面図だが、寺町より北側は標高が7 m前後で、南側（城下町）はほぼ2 m未満の低地であることがわかる。

城下町形成の際には砂丘部分から低湿地に砂を運んで埋め立てたことが想像できる。

米子城 築城の概要

1591年、吉川広家は豊臣秀吉より出雲3郡・伯耆3郡、隠岐など14万石を認められ、月山富田城（現安来市）を本城としたが、月山富田城は交通の便が悪く交易に不便でもあり、円滑な雲伯、隠岐統治を行うためには新たな政庁が必要ということで、交通の便も良く、領地・海（中海、美保湾）がほぼ見渡せる湊山に築城を着手した。しかし築城半ばで、吉川氏は岩国に国替えとなった。

1600年、替わって米子を治めたのが中村一忠である。彼と家老の横田内膳によって、1602年、城は完成し、城下町の骨格も作られた。しかし中村氏の治世も短く、1610年には加藤貞泰が米子城主となり、城下町は完成された。



米子市立図書館2005「ふるさと米子 探検隊」第2号 米子城入門の巻より転載



↑ 米子城天守は弓浜半島も見渡せる湊山頂上（標高90m）に建てられた。

城下町は米子城を中核に、西伯耆の文化的、経済的な中心都市として、繁栄した。内堀、外堀を中心に形成され城下町の町割や街道は、現在の米子の町の基礎となっている。

弓浜の開拓



皆生新田開発の象徴・八代荒神社

近世における弓浜開拓には、いくつかの要因があったと思われる。第一は、前述したように、吉川氏による米子城下の形成が始まったこと。第二は、長い戦国の時代が終わり、多くの帰農武士たちがこの地に開拓者として投入されたこと。第三は、村人たちの砂丘地克服へのさまざまな試みが甘藷や綿などの特産品を産んだこと。第四は、言うまでもなく米川の開削である。

帰農武士の砂丘地への入植

吉川氏が富田城から米子城への移転を決めたのは、海・港に臨み、海上交通の拠点としての町づくりを形成する目的もあった。これにより、広大な砂丘地であった勝田庄をふくむ日野川西岸の急速な開発が始まった。

それらの開発を担ったのが、他地域からの開拓集団の入植である。たとえば海池村（現在の皆生）では、尼子遺臣の八幡氏、海池浪人と呼ばれた堀尾家の樋口氏・小杉氏、あるいは中村氏支族の荒木氏らが開拓に励んだ。そのほかにも、米原・東福原村を開墾した美作（現在の岡山県）出身の原田氏一門、大篠津村の尼子氏の遺臣・安田氏、甲斐武田の浪人・井田氏など、枚挙にいとまがない。戦国時代の戦闘に費やされていたエネルギーが、新田開墾へ注ぎ込まれていったのである。

しかしそれは、砂とのあくなき闘いの始まりでもあった。

村人の先駆的試み①—甘藷（さつまいも）

水のない弓浜の開拓は困難を極めた。砂地に適した作物はないのか、村人の模索がつづくなか、安永9年（1780）境村の幸次郎は、石見国静間村の船頭甚右衛門から種芋を入手した。この芋は、石見の大森銀山の代官・井戸正明が窮民対策として鹿児島から移入した甘藷であった。幸次郎が試作すると、弓浜の砂地に適していたのか、どんどん収穫量が増え、近隣へ広がっていった。この甘藷こそ、まさに弓浜の命を繋ぐ食であった。

弓浜には、今も芋塚・芋代官碑が各所に残されている。



芋代官碑（境港市外江町 補岩寺）

村人の先駆的試み②—綿作

延宝4年（1676）境村の新兵衛は、備中玉島から綿の実を持ち帰った。この一粒の実が、伯耆を代表する特産物に成長していくのである。

その背景には、たとえば大崎村・五左衛門による干ばつに耐える「伯州綿*」の品種改良など、弓浜の村人のたゆまぬ品種改良の努力がある。また肥料として安価な隠岐産・中海産の藻葉を使用して、経済効率の向上にも努めた。

そしてなにより、弓浜の風土である。綿作は排水のよい砂質の土壌と、開花期には高温、実が熟す頃は乾燥を必要とするが、これらの条件が弓浜の砂丘地に備わっていたのである。

江戸時代の綿作の特産地は、初期は畿内とその周辺、中期は瀬戸内海沿岸諸国であったが、末期から明治の初期になると、関東・東海について伯耆へと移っていく。そして明治10年（1877）には、全国5位の座を占めるに至った。当時、弓浜半島に8700余りの綿井戸*があったということで、その規模がうかがえる。



綿摘み作業

米川の開削

近世における弓浜の開拓の流れをたどったが、これらの開拓を可能にしたのは、何といても米川の開削であろう。

弓浜半島は米子城築城から約100年後の元禄13年（1700）、鳥取藩は半島を貫く農業用水路（米川）の開削に取り組み、宝暦10年（1760）に60年をかけて完成させた。

左図は幕末の天保9年（1838）に完成した天保国絵図。25頁の絵図から約200年後には弓浜半島全体に村が形成され発展し、半島中央部の砂丘が開拓され、農地開発が進んだ。米川開通前と開通後100年たった文久3年（1863）を比較すると、大崎地区が39戸から255戸、渡地区が84戸から530戸に増加しており、米川の開削が地域の発展に大きく寄与したことを物語っている。

江戸初期から始まった半島の綿花生産は、米川開削もあり半島全体に広がった。北前船*で全国各地に販売され、ブランド綿「伯州綿」として地位を確立。最盛期には全国有数の生産高を誇った。

「伯州綿」は日野郡産のたたら製鉄の「鉄」とともに鳥取藩の財政を支え、明治維新後も地域経済を牽引した。



幕末1838年（米川開通後）の古地図
25頁の古地図と比較して、半島の村が約3倍増になったことがわかる。



明治から令和の時代と弓浜半島

地域社会の変遷



江戸時代に農地として開拓が進んだ弓浜半島は、明治時代になると開国を機に近代化が始まった。交易の港としての境港の整備を始めに、鉄道の敷設、戦後には道路網の整備、空港の整備など交通インフラが整い、さまざまな地域の開発が進むこととなった。海路、鉄路、陸路、空路が集積した全国でも有数の半島は、新時代をリードするエリアへと歩を進めつつある。

TOPICS

境港は水産業が基幹産業だが、それは戦後になってから。明治時代、弓浜（境から淀江にかけての砂浜）で、地引き網が行われ、カタクチイワシ・カレイ・エビなどが水揚げされていた。

当時、イワシは肥料として弓浜の綿花栽培「伯州綿」に活用された。

大正期に入ると動力船が導入され、機船底引き網漁業が発達し、漁獲高が上昇。戦後、流通網の整備とともに日本を代表する水産都市となっていた。

※戦後とは第二次世界大戦後のこと

明治から昭和（戦前） 弓浜半島の近代化

銅版画に見る境港の近代化

砂の半島・弓浜は江戸時代に不毛の大地から、日本有数の綿の生産地になり富を生み出した。そこには半島の先端・境港の存在もあった。日本海側有数の良港といわれ、境に入港した「北前船」は綿の栽培に必要なニンシンの魚肥を降ろし、「伯州綿」や日野郡産の「鉄」などを積み出した。また混載品として米や海産物などの日用品も輸送され、江戸時代中期以降急速に発展し、最盛期の明治初年には、約2000隻の船が入港していたという記録が残る。明治16年（1883）には全国主要港湾に指定され当地域の交通・運輸の中心的役割を果たした。

左図は少し時代が下った明治29年（1896）の様子を描いた銅版画。千石船*だけでなく、汽船*が描かれている。

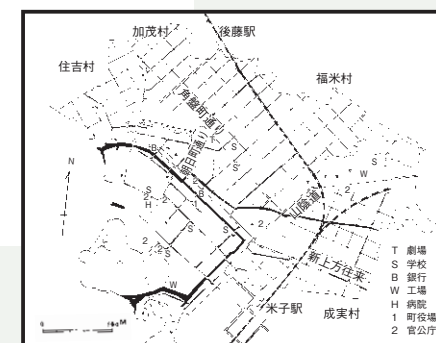
鉄道敷設が近代化を促進

明治35年（1902）、当時の交易センターであった境港を起点に半島を貫き、米子、御米屋を結ぶ山陰初の鉄道が敷設され、弓浜半島に新しい時代が来た。明治40年に鳥取まで、41年に松江に路線が伸び、45年に京都～出雲間が開通、山陰線が全線開通した。その後、交通・運輸の中心が鉄道に移り、その拠点となった米子は米子駅を中心に都市が形成されていくこととなった。

※境～米子～御米屋間に当初設置された他の駅は、大篠津、後藤、熊党、淀江。

鉄道開通に併せ、明治36年から38年にかけて城下町周辺部の畑作地帯（現在の角盤町、錦町周辺）の区画整理が行われ、従来の城下町の町割に加え、現在の市街地の基礎となるデザインが出来、角盤町通りなど街の軸になる道路が設置された。同時期、多様な会社が設立され、商工都市米子の基盤ができる（明治38年米子製鋼所、40年山陰電気株式会社、41年山陰日日新聞社、44年米子海陸運送など）。

明治45年には山陰線全線開通を記念して全国特産品博覧会が区画整理後設置された米子高等女学校（現在のふれあいの里）を会場に開かれ、30万人以上の入場者があった。この開催で米子の近代化が促進されることとなった。



明治41年当時の米子市街図（岩佐武彦氏原図）



米子市観光鳥瞰絵図（昭和11年）山陰歴史館蔵

弓浜半島に 開設された 二つの空港

皆生温泉の開発

皆生で温泉が発見されたのは明治初年頃。200m沖の海底から熱い温泉が湧いていることに漁師が気づいた。

その頃、日野川上流域で“たたら製鉄”が全盛期。土砂が大量に運ばれ、毎年浜が広がっていき、波打ち際で湧きだすようになり、明治44年に温泉源を掘り、温泉場を開業。

大正10年（1921）になると、本格的な温泉開発と温泉街の整備が始まった。当時は山陰線が全通しており、また伯備線全通も控え、大規模な温泉保養地を目指して動き出した。

大正12年（1923）には米子駅から皆生を結ぶ路面電車を計画し、2年後には角盤町（現在の米子市公会堂）から開通させ（現在の皆生通り）、翌年には米子駅前までの乗り入れを果たす。しかし、軍の命令（両三柳の陸軍飛行場造成で工事車両の支障になるとして）により、昭和13年（1938）に廃止となった。

大正14年当時は、旅館数16軒、入湯客数約10万人。当時としては驚異的と報道されるほどの入湯客数だった。

戦時中は傷病兵の転地療養所が開設され、さらに姫路陸軍病院分院（後の国立病院機構米子医療センター）も設置され、戦時下でありながら活気づいていた。

戦後は団体客が多く訪れるようになり、今日に見られるような温泉街に発展した。

TOPICS

戦時中、皆生温泉に傷病兵転地療養所、陸軍病院分院、二つの軍用空港設置など軍関連の施設が次々に整備されたが、その延長線に昭和20年3月に軍医養成を目的に設立された官立米子医学専門学校（後の鳥取大学医学部）もあった。戦後、それらはカタチを変え地域の発展を支える礎にもなった。

昭和20年（1945）8月の終戦まで、両三柳（現在の米子ゴルフ場）と大篠津（現米子空港）に軍用飛行場があった。両飛行場とも広大な砂の平地で、滑走路の造成工事が比較的容易であり、離着陸に重要な風向が安定していること、中海、美保湾の水域に面していること、さらに大陸に近いなど立地に恵まれていること等の理由で、戦時下の国策で設置された飛行場であった。



滑走路と飛行機



美保基地航空祭（昭和38年）の様子

米子陸軍飛行場（両三柳飛行場）

昭和13年に完成したのが陸軍三柳飛行場（通信省の航空機乗員養成所も設置）。14年には米子－大阪間に国内空路が開かれ、15年からは日本海横断空路が開かれ、東京－京城（ソウル）－新京（長春）を結ぶ国際線の飛行機が燃料補給を主目的に就航した。滑走路は軍用機の標準規格の1,200m。終戦で米軍に接収される。返還後、飛行場はゴルフ場、乗員養成所は陸上自衛隊・米子駐屯地に。

美保飛行場（美保海軍航空基地）

現在の航空自衛隊美保基地、米子空港

昭和14年から造成され18年に完成した美保飛行場では、艦上戦闘機、爆撃機の搭乗訓練を任務とする艦上機航空隊と甲種（少年）飛行予科練習生の教育部隊が創設され、多くの若者が日夜訓練に明け暮れた。

数千人の隊員を有し戦争末期には、爆撃部隊も配備され日本海側有数の基地となったが、終戦とともに、連合軍に接収され米軍などの進駐もあった。昭和33年に返還、航空自衛隊美保基地となった。現在は民間の米子鬼太郎空港としても広く利用されている。

昭和（戦後）から令和への変遷



戦争で多くの破壊や社会体制の大変革が行われ、混乱期もあったが、まもなく復興期を迎え昭和30年代になると高度成長期を迎え、昭和50年代になると安定成長期、昭和60年代はバブル経済期、平成時代になると低成長期を迎え現在に至る。弓浜半島や周辺の地域は時代変化とともに、大きく様変わりをしてきた。

日本海側の拠点を目指し、交通インフラの整備

道路整備

昭和30年代までは鉄道が主要な交通ネットワークだったが、40年代はモーターゼーションの進展で道路整備が一気に進み、弓浜半島を貫く主要道路・産業道路（国道431号）が昭和43年開通した。同48年には4車線となり、さらに平成9年（1997）には中国横断道岡山米子全線開通で431号と繋がり、同年「ジャパンエキスポ・山陰夢みなと博覧会」が開催され、大盛況となる。来場者は約193万人。



国道431号

空港整備

弓浜半島を横断するように立地する米子空港（航空自衛隊美保基地と共用）は昭和33年より路線が開設され、昭和55年の空港ターミナルビル供用開始以降はジェット化、滑走路延長（2500m）などにより順調に利用が伸び、国際便も就航し当地の空のゲートウェイとして重要な役割を果たす。地域の観光活性化も狙い「米子鬼太郎空港」と愛称が付けられた。



米子空港

農業

戦後は弓浜半島全体で稲作、畑作が広く行われた。さらに、中海干拓事業で平成元年（1989）に弓浜半島西側に弓浜干拓地（境港）、平成4年に彦名干拓地（米子）が供用され、広大な農地が出現した。現在の半島の主な作物はブランドにもなった白ネギ、ダイコンなどであるが、時代の変化や農業人口の減少もあり、耕作放棄地が広がる。



彦名干拓地

港湾整備

道路整備とともに境港の水産基地形成が加速していった。平成4年には水揚げ量日本一を記録し、日本を代表する漁港となった。

境港では水産、水産加工のみならず貿易、観光などの交易・交流の拠点として外港などの整備が進み、また海外からの大型クルーズ船にも対応した貨客船ターミナルも令和2年（2020）に完成した。



境港に寄港中の大型クルーズ船

鉄道（JR境線）の観光路線化

モーターゼーションに押され、一時は廃線の話も出たが、平成5年に誕生した水木しげるロードの賑わいに併せ、「鬼太郎列車」の運行や、境線の「妖怪路線化」など観光路線化をすすめ、地域にはなくてはならない存在感のある路線となった。2022年には開通120周年を迎える。



JR境線・鬼太郎列車（境港駅）

観光地化

観光地としての弓浜半島が注目されつつある。境港の水木しげるロード、鬼太郎列車の境線、夢みなとタワー周辺のマリンゾーン、ヨットハーバー、江島大橋（べた踏み坂）、そして境港と米子皆生温泉をつなぐ白砂青松の弓浜サイクリングコースの新設、ラムサール条約の拠点施設・米子水鳥公園、城ブームで見直しされつつある米子城、そして開発100周年を迎えた皆生温泉。半島全体が宿泊施設も備わったシーサイドリゾート、半島リゾートとして注目される観光地になる可能性を秘める。



夢みなと公園（境港市）

弓浜半島歴史年表

46億年前		地球誕生 (約40億年前に海が誕生)
2億5000万年前		火山活動、地殻変動で島や大陸誕生、分裂、集合を繰り返し現在へ至る
2000万年前		日本列島が大陸から裂かれる地殻変動が発生
100万年～50万年前	前期 旧石器	大山の噴火活動。古期大山成立
20万年前		ヒト（新人類）誕生 猿人・アウストラロピテクスは400万年前
5万年～1万年前	中期 旧石器	古期大山のカルデラ上に巨大な溶岩ドームを形成した新期大山成立
3万年前	後期 旧石器	大山山麓にヒトが住み始める
1万年前	縄文 草創期	日本列島と日本海が形成され、現在とほぼ同じ温暖湿潤な気候となる
5000年前	縄文 前期末	気候温暖化で、海水準が上がる（縄文海進）。内浜の海底で砂州の形成。周辺の海辺、丘陵に集落形成
2500年前	弥生	冷涼化で海水準が下がる（弥生小海退）。弓浜砂州が出現。先端部の境港と付け根の米子の砂丘地、周辺の微高地に集落立地。この頃、稲作、鉄器が伝わる
2000年前 (A.D.1年)		青木、妻木晩田遺跡など大規模な高地性集落が周辺部に立地。低地では開墾、稲作。日本海を舞台にした交易が広く行われる
100		四隅突出型墳丘墓がつつくれ始める（妻木晩田遺跡など）
200	239	邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使いを出す
300	古墳	古墳がつつくれ始め、しだいに大型化
400		渡来人の交流とともに、大量の鉄鋌が鍛冶原料として持ち込まれる。稲作の生産性が上がる
500		向山古墳群、宗像古墳群など周辺部で前方後円墳、大型円墳が築かれる
	538	仏教が伝来（日本書紀では552年）
	587	清水寺（安来市）開創
	6世紀後半	日本で砂鉄製錬による鉄の生産始まる
600	飛鳥・白鳳	聖徳太子（厩戸皇子）が活躍する
	645	大化の改新 伯耆国成立。この頃、上淀麿寺、大寺麿寺開創
	701	大宝律令完成。日本史上初めて律と令がそろって成立した本格的な律令
700	奈良	海進により弓浜砂州は一部が海面下となり夜見島と呼ばれる島になる 日野川流域などでたたら製鉄が始まる
	710	奈良の平城京が都となる
	712	古事記完成
	718	大山寺開創。同時期、美保神社創建

	720	日本書紀完成
	733	出雲国風土記完成
	741	諸国に国分寺、国分尼寺開創
	752	東大寺の大仏がつくられる
800	平安	海進がおさまり、弓浜砂州が徐々に姿を現す 日野川流域など伯耆国で広くたたら製鉄が行われる
	794	平安京に都が遷される 摂関政治が全盛期
900		この頃、伯耆（大原）安綱とその一門による日本刀の作刀が始まる。童子切など 末法思想が広まる
1000	1073	東大寺封物として伯耆から鉄鋌。20年間
	1086	白河上皇が院庁で院政を始める
1100	1185	平氏が滅び、鎌倉幕府が確立する
1200	鎌倉	1221 承久の乱 後鳥羽上皇が隠岐へ流される
	1248	出雲大社の本殿建替（3本の大柱を束ねた巨大柱の本殿）
1300	1332	元弘の乱 後醍醐天皇が隠岐へ流される 1333年隠岐脱出、船上山で挙兵 建武の新政へ
	南北朝	1338 足利尊氏が幕府を開く
1400	室町	1467 応仁の乱がおこる（～1477） 米子飯山に山名宗之が砦を築く
	1484	日野の鉄山を支配し、鉄の技術集団であった蜂塚氏が江尾城を築城
1500	1524	尼子が伯耆に侵入。米子、淀江、尾高などの城（砦）を攻め落とす
	1540	ヨーロッパ人の来航が始まる
		尼子の富田城下（安来市）栄える
	1566	毛利が尼子を破り、山陰は毛利支配下に
	安土桃山	1573 織田信長により、室町幕府滅ぶ
	1581	鳥取城落城。豊臣秀吉が伯耆一円を支配。1585年、秀吉と毛利輝元の和睦。西伯耆が毛利領に
	1590	豊臣秀吉が天下統一を果たす
	1591	吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、隠岐など12万石を与えられ、居城を月山富田城から米子に変え、この頃築城開始
1600	1600	関ヶ原の戦いで徳川家康が勝つ 吉川広家は西軍として出陣。周防国岩国に転封。中村一忠が伯耆国領主になり尾高城に入る
	1602	米子城完成。中村一忠、尾高城から米子城に移る
	江戸	1603 徳川家康が征夷大將軍に任官し、江戸幕府開く
	1609	中村一忠20歳にして死、中村家は断絶
	1610	加藤貞泰が伯耆国会見郡・汗入郡の領主となり入国
	1611	堀尾吉晴により松江城完成

	1615	大坂夏の陣で豊臣氏滅亡 幕府は一国一城令を發布するも、米子城は保存と決まる
	1617	因伯領主となった池田光正の一族、池田由之が米子城預かりとなる
	1637	池田光仲が因伯支配。家老荒尾氏が米子城預かりとなり、1869年まで代々荒尾氏が城を預かり管理
	1678	備中玉島から綿の実を入手し、綿の栽培を始める。明治時代にかけ、弓浜半島の主要な作物「伯州綿」に。明治10年には全国5位の生産量を誇る
	1694	日野郡鉄山を鳥取藩の御手山とし、鉄奉行、鉄目付を置く（～1698年）
1700	1700	弓浜半島を貫く農業用水路・米川の開削始まる。1701年両三柳村、1727年には下大崎灘まで、1759年に境港延伸
	1779	近藤家（根雨）たたら製鉄操業開始
	1780	弓浜の開拓が進むが困難を極める。石見国から甘藷を入手、命をつなぐ
	1800	日野郡産鉄は米子港から全国へ流通
	1823	砂鉄採取取締令。たたら（鉄穴流し）廃砂流出で日野川氾濫防止のため
	1835	境鉄山融通会所設置。日野郡産鉄を境港から出荷。千石船が入港、山陰屈指の貿易港として歩み始める
	1867	大政奉還・王政復古の大号令
	明治	1868 明治維新
	1869	朝廷より米子城返上の命令。1873年城内建物は売却、取り壊し
	1872	太陽暦採用
	1883	境港、全国主要港湾に指定される
	1887	日野郡二部村に福岡山製鉄所設立。近藤家、海軍省に造艦用鉄の納入
	1889	大日本帝国憲法發布
	1890	小泉八雲が松江へ（～1891） 外国産の安い綿の輸入が始まり、綿作から養蚕（桑作り）へ換金作物の転換 明治年間最大の水害が発生。日野川流域の砂鉄採取停止の陳情
	1894	日清戦争（～1895）
	1902	山陰初の鉄道（境港-米子-御来屋）開設。1907年鳥取、翌年松江まで延伸
	1904	日露戦争（～1905）
	1911	皆生の浜に温泉場が開業。たたらの廃砂が大量に供給、砂浜が沖合に広がる
	大正	1912 山陰線（京都-出雲間）全線開通。米子で全国特産品博覧会開催
	1914	第一次世界大戦勃発。鉄価上昇。1919年世界大戦講和により、鉄価下落 これを契機に日野郡すべてのたたら製鉄廃業（1921年）。同時期、日野川河口からのたたらの廃砂流出が激減
	1919	伯備線一部開通（伯耆大山-溝口間） 1928年に全線開通

	1920	皆生温泉の本格的な開発。翌年に優秀な温泉源を掘り当て、旅館が次々開業
	1923	関東大震災
	1925	米子-皆生温泉間に電車路線開業。26年には米子駅前に乗り入れ
昭和	1927	米子市誕生。会見郡米子町から郡合併による西伯郡米子町を経て市政施行
	1935	たたら製鉄の終焉で急激に皆生温泉海岸線が後退。波打ち際の旅館、源泉が波にのまれ危機的状況に
	1936	大山、国立公園に指定
	1937	日中戦争
	1938	米子-皆生温泉間の電車廃止 米子陸軍飛行場（両三柳飛行場）開設
	1941	太平洋戦争（～1945）
	1943	鳥取大震災
	1943	美保海軍飛行基地（美保飛行場）開設
	1945	官立米子医学専門学校設立（後の鳥取大学医学部） 終戦
	1946	日本国憲法公布 農地改革始まる
	1950	朝鮮戦争
	1954	米子空港開港。1958年より定期路線開設（米子-大阪）
	1956	境港市誕生
	1959	岩戸景気
	1964	東京オリンピック開催
	1971	皆生沖に離岸堤設置、砂浜が復活し1978年に海水浴場開設。1981年、国内初のトライアスロンを皆生海岸、大山山麓などを舞台に開催
	1973	第一次石油危機
	1989	バブル経済（1986-1991好景気。1993年にかけてバブル崩壊）
	平成	1995 阪神・淡路大震災
	1997	中国横断自動車道岡山山米子線全線開通 ／山陰・夢みなと博覧会（境港）
	1999	中海干拓中止決定 妻木晩田遺跡の全面保存決定。国史跡に指定
	2000	鳥取県西部地震
	2001	アメリカ同時多発テロ事件
	2004	境港と中海の江島を結ぶ「江島大橋」開通
	2005	中海がラムサール条約の登録湿地に
	2008	リーマン・ショック。世界規模の金融危機
	2009	米子空港滑走路2,500m化
	2011	東日本大震災
令和	2020	白砂青松の弓ヶ浜サイクリングコース（皆生温泉-境港）開通 境夢みなとターミナル完成。 大型クルーズ船などの拠点

あとがき

これまで弓浜半島の歴史を太古より現代まで俯瞰（ふくかん）してみました。地球規模での地殻変動、気候変動がこの地域の基礎的地形を創（つく）り出し、さらに私たちの祖先の営（い）みが加わり、巨大な弓状の砂州を形成することとなりました。その規模は大山の麓（ふもと）から境港まで美保湾岸約20キロ、米子城のある湊山から境港までの中海側の海岸が約16キロ、幅は3～4キロと壮大なもの。あたかも霊峰（れいほう）大山から「神々の国の首都・出雲」の地につながる巨大な架け橋のようでもあります。そんな大地で、先人は砂と闘い、そして後には砂の恩恵を受けて豊かな地域を作り上げてきました。そして現在は、未来を指向したサステイナブル（持続可能）な挑戦が始まりつつあり、さらなる可能性を広げています。この「Roots 弓浜半島物語」の発刊が当地ならではの“砂州（サス）テイナブルデザイン”を描くきっかけにいただければ幸いです。

※サステイナブル（Sustainable）とは、国際社会共通の目標として国連に加盟するすべての国（193か国）の全会一致（さいたいく）で採択された「SDGs ～ Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）～」の重要なキーワード。わかりやすく表現すると「すべての人と地球環境（はいてりやう）に配慮することで、より良い状態を守りながら未来へと受け継いでいくこと」といった意味合いになります。

Roots 弓浜半島物語

2020年12月 1 日 第 1 刷発行
2021年12月 1 日 第 2 刷発行

発 行	鳥取県経済同友会西部地区（ふるさと教育特別委員会）
発行人	松村 順史（鳥取県経済同友会代表幹事）
文・編集	石村 隆男（ふるさと教育特別委員会委員長） 黒田 一正（伯耆の古代を考える会会員）
協 力	大山山麓・日野川流域観光推進協議会 鳥取県西部総合事務所地域振興局 米子市経済部文化観光局文化振興課
写真・絵図提供、協力	鳥取県立博物館／米子市立山陰歴史館／米子市立図書館／一般財団法人 米子市文化財団／境港市史編さん室／松江市立松江歴史館／角磐山 大山寺／島根県安来市 和銅博物館／島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会／国土地理院の電子地形図を加工して作成（P4・7・12・14・20）／国立公文書館デジタルアーカイブより伯耆国絵図（P27）
デザイン	岩本 義英
印 刷	今井印刷株式会社
製 本	日宝綜合製本株式会社

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は、著作権法上での例外である私的利用を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
Printed in Japan

[目次]

Chapter 1 (第1章)	弓浜半島の地形の成り立ち。地形の変遷を探る。
Chapter 2 (第2章)	旧石器・縄文・弥生時代の地域の歴史。
Chapter 3 (第3章)	古代(古墳時代～平安時代)の地域の歴史と神話と地名考。
Chapter 4 (第4章)	中世(鎌倉時代～室町時代)の地域の歴史と“たたら製鉄”の歴史。
Chapter 5 (第5章)	近世(江戸時代)の地域の歴史と弓浜半島の開拓の歴史。
Chapter 6 (第6章)	近代、現代(明治時代～令和時代)の地域の歴史。
巻末資料	弓浜半島歴史年表

ルーツ	植物などの根元(根っこ)、大本の意味から転じて、物事の始まり、根源、由来や祖先のことを表します。
-----	--

Chapter 1

砂州

いずものくにふどき
出雲国風土記

河川周辺で、川や海の流れてによって砂や岩がたまって形成される細長い地形。

和銅6年(713)、諸国に風土記の編纂が命じられ、天平5年(733)に『出雲国風土記』が完成。完全な形で残るのはこの風土記だけ。伯耆国も風土記が作成されたが、逸文のみが伝わる。

海進・海退

気候の変化(温暖化、寒冷化)などによって海面の高さが上下する現象。海進は海面が高くなり、内陸部まで海が入り込み、海退はその逆の現象。

たたら製鉄と鉄穴流し

砂鉄を原料とし、木炭を燃料として行う製鉄方法。中世以降、鉄の需要増大で砂鉄を大量採取するため、山を人為的に切り崩す手法「鉄穴流し」が行われ、膨大な量の土砂(廃砂)が川から海へ排出された。

対馬海流

太平洋を流れる黒潮から分かれ、東シナ海から対馬海峡を経て日本海東側を流れる暖流。

Chapter 2

黒曜石

火山岩の一種で、黒色、ガラスと似た性質をもち、割ると鋭い断面になることから、旧石器時代からナイフや矢尻として使用された。現在も隠岐の島で産出する。

サヌカイト

讃岐岩とも言われ、香川県などで採取される安山岩。古代の石器の材料として使用された。

潟湖(ラグーン)

砂州やサンゴ礁によって外海から隔てられた浅い水域。

Chapter 3

纏向遺跡

奈良県桜井市に位置する弥生時代末期から古墳時代前期に営まれた集落遺跡。大和王権の発祥の地であり、前方後円墳の発生の場でもある。

りつりょうこく か
律令国家

中国の隋^{ずい}や唐^{とう}などを参考に、7世紀後半（飛鳥時代後期）から10世紀の間に実施された政治制度。公地公民（土地や人はみな国のものとする制度）を基本とし、税や兵役など、さまざまな法が定められていた。

みほ さき
三穂の埼
しらぎ
新羅

島根県松江市美保関町に位置する島根半島の東端地域のこと。

いつぶん
逸文

古代の朝鮮半島南東部にあった国家。高句麗・百済との三国時代を経て、7世紀には半島をほぼ統一、高麗により10世紀に滅亡した。

あいののこり
相見郡

古い書物は完全な形で残ることは稀だが、他の書物に「〇〇風土記」などとして引用された文章を逸文と呼ぶ。

こり ごう あまり べ
郡と郷と余戸

会見郡とも表記する。現在の米子市を中心に南部町・伯耆町などの地域。

すく なひ こな ぬ
スクナヒコナ命（少彦名命）

律令制の行政組織として、国・郡・郷（里）が定められ、とくに郷は50戸ごとに設けられ、それに満たない地域を「余戸」と呼んだ。

「古事記」「日本書紀」、各国の「風土記」に際し登場する神。常世という海の向こうからやってきた小人神で、大国主命と協力し合って国を造り固め、その後、常世に去って行った。穀物、医薬、酒造、温泉などをつかさどる神とされる。伯耆国風土記（逸文）の粟嶋（現・米子市彦名）の項では、この地で粟を蒔いて、実って弾けた粟の穂にのって常世に渡ったと伝えられている。地名の彦名はスクナヒコナに由来。

よみ とこよ
黄泉の国・常世の国・根の国

古代において人が死ぬと、海の底や海上の島、地下の世界などに行くことされ、その地をこのように呼んだ。

いざ な み ぬ
イザナミ命

夫のイザナギ命とともに日本列島を作り、神々を生み出した神。火の神を産んだ際に亡くなり、古事記では伯耆と出雲の境の比婆山に葬ったとされる。

す さ の お ぬ
スサノオ命

イザナミ命の子で、天照大神・月読命とともに三貴神と呼ばれる。母（イザナミ命）の死後、母を訪ねて出雲に下り、ヤマトノオロチ退治などで活躍。

とりがみ みね せんつうざん
鳥髪^{トリガミ}の峰（船通山）

スサノオ命が出雲に下る際に降り立った山。現在の島根県・鳥取県の県境に位置する船通山に比定される。

おおくにぬしぬ
大国主命

古事記、日本書紀に登場する神。大国主は国造りを行った大いなる国主の意で、天津神（高天原の神々）の主神たる天照大神に対して国津神（土着の神々）の頭領とされる。国土を高天原の神に譲った神として語られている「国譲り」、「因幡の白兔」の神話は有名。出雲大社の祭神。

わ あふりゅう
和名抄

和名類聚抄の略。平安時代中期の承平年間（931～938）に成立した漢和辞書。その中に全国の国や郡、郷の名前が網羅されている。

むなかつ むなかつ
宗形（宗像）神社

米子市宗像に鎮座する式内社（当時の国が認めた神社）。本社は九州の福岡県宗像市にある宗像大社。

あずみ
安曇

全国各地に分布する海の民。本拠地は志賀海神社が鎮座する福岡県東区志賀島を中心とする地域とされる。

しょうえん
莊園

公地公民を定めた律令制は、奈良時代には崩れはじめ、有力者の開墾した土地の私有を許し、また有力な貴族や社寺に土地を寄進して税を逃れた。これらの土地を莊園と呼ぶ。

Chapter 4

ごだいごてんのう
後醍醐天皇

第96代天皇。元弘の乱（1331）で敗れ隠岐に配流。隠岐国から脱出し、名和氏など伯耆の武将を頼って拳兵。建武の新政へと巻き返しを図った。

べんかん
弁韓

紀元前2世紀末から4世紀において、朝鮮半島南部にあった三韓（馬韓・辰韓・弁韓）の一つ。

かや
伽耶

いとこく なこく
伊都国・奴国

3世紀から6世紀中頃における朝鮮半島南部に散在していた小国家群のこと。

伊都国は現在の福岡県糸島市・福岡市西区付近にあった弥生時代の国。奴国は現在の福岡市や春日市などにあった弥生時代の国。ともに中国の史書『魏志』倭人伝に登場する。

きび
吉備

現在の岡山県、広島県東部など、古代の吉備国が支配した地域。後に備前・備中・備後・美作に分国された。

てっさい
鉄滓

たたら製鉄においては、砂鉄と木炭を炉にいれて燃焼し、砂鉄を還元して鉄を作るが、砂鉄中に含まれる不純物はスラッグとして排出される。この排出物を鉄滓という。

ちよう ちよう
調、庸

飛鳥時代に国民に課された租税制度を「租庸調」と呼ぶ。祖は田に課される税、庸は労役の代わりに収める布のこと。調は朝廷への貢物のことで、繊維製品や各地の特産物での納入が認められていた。

てつてい くわ
鉄鋌、鋏

伯耆国は鉄を「調」として貢納する際、運びやすいように鉄を小形の直方体に加工して鉄鋌にしたり、鋏に加工して送り出した。

鬼退治の伝説

各地の伝説や昔話にはよく鬼退治が登場する。この鬼退治の話の背後には製鉄民と農耕民の争いがあったのではないかと考え方がる。

こうれい
孝霊天皇

第7代の天皇。実在性は疑わしいが、系譜に吉備津彦など吉備系の子孫が多く、吉備と何らかの関係があったと考えられる。

きのなりもり
紀成盛

平安時代末期の武将。元々、紀伊国（現 和歌山県）を本拠とする名族の流れをくみ、伯耆守として土着して在地領主となった。伯耆町長者原を本拠として会見郡を支配した。

かいとうぐん
会東郡

紀成盛が大山寺に奉納した鉄製厨子（仏像などを安置する仏具）では成盛は自らを「会東郡地主」と称している。地域としては会見郡の東側の地域を指すと思われる。

かいろうく
海六

成盛は大山寺奉納の鉄製厨子では「紀」氏を名乗るが、他の文献では「海六」を主に名乗る。会見郡の海の民「海」氏と関わる可能性が指摘されている。

ぐんじ
郡司
しゅご
守護

しゅてんどうじ
酒呑童子伝説

そ
反りと鎬造り

律令制下において、中央から派遣され、国司の下で郡を治めた地方官。

鎌倉・室町幕府が設置した職制で、国単位で置かれた軍事・行政における指揮官。

たんぱ だんぱん (京都府北部) 大江山に住む鬼たちの統領・酒呑童子を平安時代の武将・源頼光が退治した伝説。その時に使用した日本刀が童子切安綱とされる。

反りは刀剣が弓なりになっている状態。長い日本刀でも容易に抜き差しでき、不安定な馬上でも楽に抜刀できる。鎬とは刃と峰の間の膨らみ部分。鎬があることで、頑丈で切りやすい形となっている。

Chapter 5

きっかわひろい
吉川広家

うんぱく
雲伯

かずただ さだやす
中村一忠・加藤貞泰

はくしゅうめん
伯州綿

わた いど
綿井戸

きたまえぶね
北前船

戦国時代後期から江戸時代初期の武将。毛利氏の家臣であったが、天正19年(1591)豊臣秀吉の命で、月山富田城(安来市広瀬町)に入り、出雲3郡・伯耆3郡などを支配。海に近い米子城への移転を決め、近世米子の礎を築いた。後、周防国岩国藩(現山口県)に転封。

「雲」は出雲国、「伯」は伯耆国のこと。併せて雲伯と表現。同一の文化圏で、島根県東部から鳥取県西部の方言を雲伯方言と呼ぶ。また、旧国名は全て漢字二字だが、その一字をとって「〇州」と通称した。出雲国は「雲州」、伯耆国は「伯州」。

広家転封後、駿府(現静岡県)から中村一忠が入るが、一忠の死などにより、美濃国(現岐阜県)から加藤貞泰が移って来た。しかし加藤氏も7年後、伊予大洲藩(現愛媛県)に転封した。

弓浜半島で栽培された綿は伯耆国の異名、伯州から伯州綿と名付けられた。高品質で知られ、北前船によって境港から全国各地に運ばれた。たたら製鉄の鉄とともに鳥取藩の財政を支えるほどのブランド産品だった。

綿の栽培には水は欠かせない。真夏には1日に何度も水やりが必要で、畑に小さな池(綿井戸)を掘り、そこにたまった水を桶(水汲みタゴ)に汲み、綿に水をやった。大変な重労働だった。

江戸時代から明治にかけて日本海を舞台で活躍した海運船。3月下旬に、大坂―瀬戸内―日本海のルートで北上し、北海道に至る。7月下旬には逆に南下し、11月大坂に帰着、その間、各寄港地で商売をしながら、往復した。(※古くは、大阪は大坂と表記した)

Chapter 6

せんごくふね
千石船

き せん
汽船

木造の巨大帆船。米1000石を積める能力から、江戸時代に普遍化した大型荷船の俗称。(※一石は約150kg)

風力を利用して走る帆船と異なり、石炭などを燃料とした蒸気機関を動力源とする船舶。